

国 語 科

小学校第6学年および中学校第3学年について

目 次

I 研究の目的	9
II 研究の内容と方法	9
〔分析調査の対象として取り上げた全国学力調査問題〕	9
〔分析的問題〕	9
小学校第6学年	9
中学校第3学年	14
〔実施の方法〕	18
〔実施の対象生徒〕	18
〔実施の時期〕	18
III 研究の結果とその考察	18
1. 小学校第6学年	18
(1) 調査問題 <input type="checkbox"/> 二, 四 について	18
(2) 調査問題 <input type="checkbox"/> 一 について	28
(3) 調査問題 <input type="checkbox"/> 二 について	31
(4) 調査問題 <input type="checkbox"/> 四 について	33
2. 中学校第3学年	38
(1) 調査問題 <input type="checkbox"/> 1, 5 について	38
(2) 調査問題 <input type="checkbox"/> 4 Ⅱ 1, 3 について	41

I 研究の目的

全国学力調査の読解領域における子どもの応答を見ると、文章の読みというものがじゅうぶんにできていないように思われる。そこで、文章の読みという点から、子どもたちがそこに提示された問題本文を、どのように読んでいるかを吟味し、そうした子どもの文章の読みが、学力調査のような設問形式において、どのようにあらわれるかを分析する。このことは、ことばをかえていえば、学力調査問題場面における子どもの読みを追究することであり、また、こうした調査問題が、はたして子どもの読みを、どの程度評価し得るかを吟味することでもある。

II 研究の内容と方法

【分析調査の対象として取り上げた調査問題】

小六	☐	二	説明文	「文脈の中の語句の意味を考える」	(36.3)
		四		「文章の要点を読みとる」	(23.8)
	☐	一	物語文	「情景を読み取る」	(35.2)
		二		「文脈の中の語句の意味を考える」	(38.2)
				「心情を読み取る」	(56.7)
中三	☐	5	説明文	「文章の構成を読み取る力」	(32.6)
	☐	II 1, 2	説明文	「文章を組み立てる力、ことばのきまり の理解」	(42.7) (27.7)

(「」は出題のねらい。()内数値は全県平均正答率)

概して正答率の低いものを取り上げた。これらの問題には、なんらかの意味で問題自身に問題のあるものが多い。また、その応答の内容を調べてゆくと、その応答にいろいろ疑問の点があって、たとえば、その正答している内容を調べてゆくと、本当にはわかっていないで正答していると思われるものがかなりある、というようなことが知られる。そして調べてゆくと、こうしたことは、単に〇×式ペーパーテストの性格からくるものとだけには、言い切れないように思われるのである。子どもの文章の読みやその理解の断片性、不連続性ともいべきものが、そこに感ぜられる。そしてこれは、文章の読みの成熟してゆく過程にあらわれる現象ではないかとも考えられるのである。このへんの子どもの読みの相を、以上の学力調査の結果を分析しつつ見てゆきたいと思う。

【分析的問題】

小学校6年 (調査問題および分析的問題は縦書きで提示されたものであるが、本稿では小・中学校とも横書きで示した。)

☐ (本文)

「世界じゅうには、たくさんのさばくがあります。これらのたくさんのさばくには、動物や植物も少

なく、人間もほとんどすんでいません。それは、さばくでは、動物や植物が生きていくことが、たいへんむずかしいからです。では、さばくでは、なぜ動植物が生きていくことがむずかしいのでしょうか。それは、さばくには、水がないからです。(1) ひじょうにかんそうして、大地の表面がからからかわききっているからです。

①

さばくでも雨がまったくふらないわけではないのですが、さばくの大部分は、一年間の降水量（雨や雪などのふる量）が二百五十ミリ以下という、たいへんかんそう地たいです。所によっては、ほとんど雨がないうちもよい所もあります。日本各地の年間降水量は、だいたい千二百ミリから二千五百ミリぐらいですから、これとくらべてみると、さばくはどんなに雨が少ないかわかるでしょう。そのうえに、わずかにふる雨も、一年間に平均してふるのではなくて、そのふりかたがきよくたんにかたよっているのです。ふらないときには、いくら待ってもふらないのですが、ふるときには、すなや石などをおし流すほど、すさまじいふりかたをします。そして、そのあとはけろりとして、やけつくように太陽が照りつづけます。ですから、水分は、またたくまに地面にすい取られていくだけでなく、ものすごいはやさで蒸発してしまいます。つまり、せっかく雨がふっても、さばくの土地は、

②

(2) 水持ちがよくないので、たちまち しまうのです。

ところで、さばくというと、あなたがたは、とても暑い所だと考えているでしょう。しかし、さばくは、いつでも暑いというわけではありません。むしろ、さばくの気候の特徴は、気温の変化がひじょうにはげしいことだといってもいいのです。さばくの中には、夏の気温が、しばしば五十度以上にものぼることがありますが、冬になるとしもがおりる所さえあります。また気温は、季節によっていちじるしく変化するだけでなく、一日のうちにもはげしく変わるのです。昼はひじょうに暑い所でも、夜になると氷点以下に気温の下がることも、けっしてまれではないのです。

③

このように、気温の変化のはげしいのは、さばくがひじょうにかんそうしていることが、大きな原因となっています。気温の変化がひじょうにはげしいということも、ふつうの動植物を生きにくくさせているのです。

④

[I]

この文章の中の の中に、ことばを入るとすれば、つぎのどれがよいですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○で囲みなさい。

- 1 蒸発して
- 2 すい取られて
- 3 かんそうして
- 4 おし流されて

[II]

— さばくが、(1)「ひじょうにかんそうして、大地の表面が、からからにかわききっている」わけが、この文章の中に説明してありますが、それはどの部分ですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ

選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 ②段 2 ③段 3 ④段 4 ②③段 5 ③④段 6 ②③④段

二 ここで「さばくの土地は、⁽²⁾水持ちがよくない」といっているのは、さばくのどういう点をさしていっているのですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 ふった雨水は、またたくまに地面にすい取られていく。
- 2 ふった雨水は、ものすごいやさで水蒸気になって蒸発してしまう。
- 3 ふった雨水は、またたくまに地面にすい取られ、一方ものすごいやさで水蒸気になって蒸発してしまう。
- 4 雨がふらないときには、いくら待ってもふらないのに、ふるときには、すなや石をおし流すほどすさまじくふる。

三 この文章の中には、さばくに水がない理由について、いろいろのべていますが、それをまとめていけば、どのようになりますか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 さばくは、雨が少ないうえにかたよってふり、水持ちがわるい。
- 2 さばくは、雨が少ないうえに、ふった雨はすぐ蒸発してしまう。
- 3 さばくは、雨が少ないうえに、一年間平均してはふらない。
- 4 さばくは、雨が少ないうえに、ふるときにはすさまじくふる。

四 つぎの問題は、前にもしましたが、もう一度本文をよくよんで、答えてください。答えは、前のときのとかわってもかまいません。この文章の [] の中に、ことばを入れるとすれば、つぎのどれがよいのですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 蒸発して
- 2 すい取られて
- 3 かんそうして
- 4 おし流されて

〔二〕 (本文)

さかな屋さんからもらった子かには、アむずむずと足を動かしています。見ると、イ頭みたいなどころに、ビーズ玉みたいな小さな二つの目が、ぴかっと、光っていて、ウなにかを見つめているように思われました。

◎ そして、かにはかにで、エそんなちっちゃな子がにでも、からだにふにあいなほどの、大きなはさみをもっているのです。オ子かにはそのはさみを、ぶるぶる、ふるわすように、たえず動かしているのです。

子かをながめていると、ふき(少女の名)のまぶたに、彼のうちよせている夜の海への光景が、ありありとうつつ見えまして。そしてその暗い海の底に、親かにといっしょに、たくさんのちっち

ゃな子がにたちが、たがいによりそいながら、無心にあそんでいるありさまを想像したのであります。海の小さな生き物は、海へ——ふきは、ふと、そう思ったのです。そこで、ふきは、おとうさんに声をかけました。

「おとうちゃん、これから、海へいこうよ。」

〔₍₁₎海へ。もう、暗くなってしまったじゃないか、ふき。〕

「だから、わたし、いきたいわ。夜の波の中へ、ちっちゃなかに、はなしてやりたいんだもの。」

「ほう。そんなこと、したいのか。」

ふきは、つめたい子がにを手ににぎって、おとうさんとふたり、外に出ました。町通りから、暗い小さな路地をぬけていくと、もう、ザー、ザー、ザー、という波の音がひびいていて、すぐ、はま草のしげっている海へに出られました。

星がきらきらと光っている空の下に、夜の海ははても知られず、ぼうぼうとつらなっていて、海へには、たえまなく、波のうちよせる音が、くりかえし、くりかえし、ひびいているのであります。いそのにおいが、ふうんと、します。ふきは、はい色のすなはまを、サク、サク、サク、とふんで波うちぎわにいきました。

「ふきっ、あぶないよ。」

うしろの方から、おとうさんのさけぶ声がしました。

波は、夜目にも白く見えて、ふきのげたをしっとりとぬらすのでした。

「ほら、海へかえっていきな。」

そういって、ふきは、手の中の子がにを、青黒い波の中へ、ジャブン、となげ入れてやりました。が、それっきり、子がにのすがたは見えませんでした。

〔おとうちゃん〕

〔₍₂₎おい。〕

〔かに、海へ、はなしてやったよ。〕

〔ああ、よかったね。〕

暗い海へに立って、父と子は、こうかたりあいました。

〔Ⅱ〕

一 この文章全体を読んで、◎をつけた部分に、あなたはどのようなことをいちばん強く感じますか。つぎの中から一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

1. 子がにという小さな生きものの、かたちのおかしさ
2. はさみをたえず動かしている子がにの、おちつきのなさ
3. 小さいながらもいのちのある小がにの、いじらしさ
4. ビーズ玉のような小さな目をもった子がにのふしぎさ

○ あなたがそのように感じたのは、この文章のどの部分ですか。左の記号を○でかこみなさい。(一つでもよいし、二つ以上でもよい。)

ア イ ウ エ オ

○ 右の 8 小さいながらもいのちのある子がにの、いじらしさ の中の、「いじらしさ」ということばの意味に、いちばん近いと思うのは、つぎの中のどれか。一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 心細げな、いじけた、どこことなく元気のないようす
- 2 意志が強く、どこかごうじょうなところのあるようす
- 3 おさなくてかわいそうに見え、いたわってやりたいようなようす
- 4 いきいきとして、あかるく元気なようす

二 (1) 「海べへ。もう、暗くなってしまったじゃないか、ふき。」

この「 」の前後の文章をよく読んで、この「海べへ。」ということばが、どのような意味に使われているか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 海べへいってはいけない。
- 2 海べへ行こう。
- 3 海べへいきたいんだね。
- 4 海べへいくんだって。

○ また、右の (1) 「海べへ。」ということばは、どんな気持ちをあらわしているか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 人をさそう気持ち
- 2 意外に思ってたずねようとする気持ち
- 3 とめようとする気持ち
- 4 同情する気持ち

三 この文章の中の (2) 「おとうちゃん。」「おい。」……かたりあいました。に、父と子のどんな気持ちがあらわれていますか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 子がにを海へはなしてやって満足した気持ち
- 2 子がにを海へはなしたあとのさびしい気持ち
- 3 親のもとにかえった子がにをうらやむ気持ち
- 4 子がにを海へはなしたのをさんねんに思う気持ち

[IV]

本文をもう一度読んでから、つぎの問いに答えなさい。

一 この文章のおわりの部分で、「かに、海へ、はなしてやったよ。」といったとき、ふきは、どんな気持ちだったでしょうか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 子がにを海へはなしてやったことに満足している。
- 2 子がにを海へはなしたあとのさびしさをあじわっている。

- 3 親のもとにかえった子がにをうらやんでいる。
- 4 親のもとへかえる子がにのしあわせを思いやっている。

二 「ああ、よかったね。」といったとき、父親は、どんな気持ちだったでしょうか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかきなさい。

- 1 暗い海岸で無事に子がにを海へはなしてやったのを見て安心した気持ち
- 2 一びきの子がにの命を救ってやった子どものおこないを喜んでいる気持ち
- 3 子がにを海へはなしてやった子どもの気持ちをいつくしんでいる気持ち
- 4 子がにを海へはなしたあとのさびしさをまぎらわそうとする気持ち

中 学 校 3 年

(1)

次の文章の全体を意味の上から考えて、いくつかに分けるとすれば、あなたはどこで分けますか。分けようと思うところに、それぞれしをつけなさい。

ロンドンの有名な公園 Hyde Park に、Marble Arch と名づけられている一角がある。ここでは、毎週土曜日と日曜日、さらに祝祭日の午後に、各種各様の議論の花が自由に咲き競う場所としてはなはだ有名であるが、私はここで、それこそほんとうの意味での「言論の自由」の尊さを味わえた。

この Marble Arch でくりひろげられる議論の内容は、宗教、政治、経済、教育、一般人生論等、きわめて多彩であるが、演説者は、そまつで持ちこたひの自由な小さな台に登壇して自説を訴え、それを幾重にもとり囲んで、聴衆がきわめて熱心に耳を傾け、活発な討論をくりひろげるのである。しかもこうしたグループは一つ二つに限らず、Marble Arch のここかしこに、自然のうちにいくつものサークルがつくられるのを常としている。

私は、ロンドン滞在中、ここで、言論の自由の確立にとって、絶対的に不可欠と云うる条件を、少なくとも三つ、理論というよりも体験として確認しえたのである。

その第一は、自分の言うべきことを明確に表明する能力と勇気とを持つことである。「沈黙は金」ということわざは洋の東西を問わず厳存しているが、特にわが国ではことばに言い表わすことよりも、沈黙を守ることのほうに奥ゆかしさと頼もしさを感じがちであり、口べたの者にむしろ誠実さ、実直さを見いだしがちであった。しかしながら民主社会では、言うべきことは明確に、かつ勇敢に表明することが第一義的に大事なことなのである。

第二は、他人の言うことに耳を傾け、それを理解しようと心がけるとともに、相手をして、その思うところをじゅうぶんに言わせる、寛大、謙譲の精神を確保することである。このことは、民主社会の成立のための最も基本的な条件であって、これなしには、建設的な言論の自由は存しえないのである。

第三は、語るに価するだけの内容あるものを、常に自己のうちにたくわえ持つとともに、他者の言論を

ただちに正しく評価し、批判するだけの実力を備え、逆にやすやすとそれから影響されることなく、しかも学ぶべきものがあれば、それによって自己を反省、吟味する柔軟さ、謙虚さを持たねばならないということである。そしてこの能力は、一部の専門家だけに期待されるべきでなく、社会のあらゆる階層者に、少なくとも可能性として確保されなければならないのである。

幸いわが国でも、言論の自由の重要性は、近年広く一般に認識されだしたと言えるが、なんといってもそれはまだ頭だけの段階にとどまり、真に身についたものとなっていない。私は、わが国においても、このマーブル＝アーチのようなところが見いだされることを祈るものである。

(I)

一 次の㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、をどんな順に続けたら、全体として意味のまとまった一つづきの文章になるでしょうか。答えは、アからオまでの中から、最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

- ㉔ 意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。(1)もと、瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器の一般の名称となったのは、この例である。(2)
- ㉕ たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって「やぶく」となったりする。
- ㉖ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって変化するものがある。(3)
- ㉗ 意味が狭くなることもある。(4)衣服一般の意味であった「ころも」が、僧衣のことになったのが、これである。(5)
- ㉘ 意味も、時とともに変化するものがある。

- | | |
|------------------|----------------|
| ア ㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、の順 | イ ㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、の順 |
| ウ ㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、の順 | エ ㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、の順 |
| オ ㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、の順 | |

二 次の文を、一の√の(1)から(5)までの中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。答えは、アからオまでの中から、最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられたりするもの、この例である。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア (1) | イ (2) | ウ (3) | エ (4) | オ (5) |
|-------|-------|-------|-------|-------|

(II)

一 左のア、イ、ウ、は、ある文章を五つの小段落にくぎって、それぞれその順序を入れかえて綴ったものです。いまこの三つを読みくらべたとき、全体として意味のまとまった一つづきの文章として、どれが最も適当と思うか。一つを選んでその記号を○で囲みなさい。

- ア 意味も、時とともに変化するものがある。

たとえば「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって「やぶく」となったりする。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が、僧衣のことになったのが、これである。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

イ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって、「やぶく」となったりする。

意味も、時とともに変化するものがある。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになったのが、これである。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」がやがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

ウ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって「やぶく」となったりする。

意味も、時とともに変化するものがある。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになったのが、これである。

二 右の**ア**、**イ**、**ウ**のうち、適当でないと思った二つのものについて、それぞれ()の中にその記号を書き入れて、どういう点がよくないか、そのわけを説明しなさい。

()

()

[IV]

次のA群に書いてあることからの説明として、それぞれ該当するものをB群の中から選んで、その記号を()の中に書き入れなさい。

- A () 1 「ながく」が「ながらく」になり、「破る」が「やぶく」になる。
 () 2 「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられる。
 () 3 瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が陶器一般の名称になる。
 () 4 衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになる。
- B **ア** 単語の意味が変化した場合、前の意味より広い意味になることがある。
イ 単語の意味が変化した場合、前の意味より狭い意味になることがある。
ウ 単語の形が、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

[V]

これは前に解答した問題ですが、もう一度よく考えて答えてください。答えは、前のときのと変わってもかまいません。

- ㉔ 意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。✓1/もと、瀬戸^{せと}という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。2/
- ㉕ たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって、「やぶく」となったりする。
- ㉖ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。3/
- ㉗ 意味が狭くなることもある。4/衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになったのが、これである。5/
- ㉘ 意味も時とともに変化するものがある。

次の文を、右の✓の1から5までの中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。最も適当なもの一つ選んで、その番号を○で囲みなさい。

「花見」の「花」のように「花」が桜に限って用いられたりするのも、この例である。

答 え

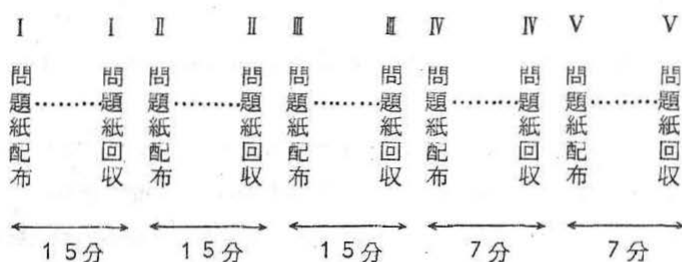
1 2 3 4 5

【実施の方法】

小学校 6 年



中学校 3 年



【実施の対象生徒】

小学校、中学校ともに、3か校、各1学級（計約150名）に実施し、その中から無作為抽出により100名（男子50、女子50）を選出し、その者について、その結果を処理した。

【実施の時期】

昭和39年9月

なお、調査問題は6月に受けているので、この分析的問題実施までには約3か月を経ている。

Ⅲ 研究の結果とその考察

1 小学校才6学年

(1) 調査問題 一、二、四

一 本文 分析的問題 一 本文参照（ただし、「さばくの土地は、水持ちがよくないので」の「土地は、」の読点は調査問題にはない。）

二 この文章の中の の中に、ことばを入るとすれば、つぎのどれがよいですか。

- | | | |
|---|-------------|----------------------------|
| 1 | じょう
蒸発して | (38.7) |
| 2 | すい取られて | (16.7) |
| 3 | かんそうして | (40.7) [36.3] [36.6] |
| 4 | おし流されて | (3.4) |
| | (無答 | 0.6) |

四 この文章の中には、さばくに水がない理由について、いろいろとのべていますが、それをまとめていえば、どのようになりますか。

- | | | |
|---|---------------------------|----------------------------|
| 1 | 雨が少ないうえに、かたよってふり、水持ちがわるい。 | (31.1) [24.0] [28.7] |
| 2 | 雨が少ないうえに、ふった雨はすぐ蒸発してしまう。 | (49.2) |
| 3 | 雨が少ないうえに、一年間平均してはふらない。 | (8.8) |
| 4 | 雨が少ないうえに、ふるときには、すさまじくふる。 | (11.0) |

() 内数値は、県抽出10校の応答分析結果による応答率。[] 内数値は、全県平均正答率。同じく太字は全国平均正答率。

この調査問題二は、「文脈の中の語句の意味を考える」ことがねらいとされている。その応答を見ると、「かんそうして」(正答とされている)と「蒸発して」とは、ほぼ同等の応答率を示している。そこで、問題本文を見てみると、そうした応答をもたらした要因が、実は本文自身の中にあるのではないかと思われるふしがある。いま、この応答をもたらす本文の読みについて、まず考えてみたい。

A 「蒸発して」を入れる読み

……やけつくように太陽が照りつづけます。ですから、水分は、またたくまに地面にすい取られていくだけでなく、ものすごいはやさで水蒸気になって蒸発してしまいます。つまり、せっかく雨がふっても、さばくの土地は水持ちがよくないので、たちまち蒸発してしまうのです。

ここに引用した文章の前半は、太陽が照りつけるので水分が蒸発してしまうことが強調されている。「つまり」以下の文は、前文で述べたところをもう一度繰返し説明したものと受けとれる。「さばくの土地は水持ちがよくないので」は、挿入句として軽く読み過ごされる。こうして「水分は」という主語が「つまり」以下の文でも一貫して主語として作用している。このような読みにも裏付けられていると思われる。そしてこの読みは、ここの文章の読みとしてはむしろ自然の読みであるといっていっても知れない。

B 「かんそうして」を入れる読み

……ですから、水分は、
 { またたくまに地面にすい取られていく (だけでなく、) (a)
 { ものすごいはやさで水蒸気になって蒸発してしまいます。 (b)

つまり、せっかく雨がふっても、さばくの土地は水持ちがよくないので、

「さばくは」たちまちかんそうしてしまうのです。

この読みでは、「つまり」という語は、(a)と(b)を同等の重さのものとして受けて、これを一まとめに

して、「さばくの土地は水持ちがよくないので」と、その意味を説明し、その結果（水持ちがよくないので）、さばくはたちまちかんそうしてしまうという、この段落全体の結論を導いている。この場合、「つまり」以下の文は、段落の結びとして重要な意味をになうものであり、かつ、そこに「さばくは」という主語が省かれていると見なされる。（もしくは、文中の「さばくの土地は」を主語と見なしてもよいであろう。ただし、その場合は、「さばくの土地は」の次に一つ読点が欲しい。）

さて、この文章を前から読んでくると、「またたくまに地面にすい取られていく」(a)ことの具体的な説明が文中のどこにも書いてないので、(a)と(b)を同等の重さには受け取り難い。この文章は、太陽が照りつけるので水分が蒸発することが強調されて受取られる。したがってこの「つまり」が上の(a)(b)をまともに受けて「さばくの土地は水持ちがよくないので」を導き出す力に乏しい。その結果、「さばくの土地は水持ちがよくないので」ということばが、じゅうぶんの重みをもたず、挿入句的に軽く読み過ぎられるおそれがじゅうぶんあるのである。ここに「かんそうして」を入れることを決定づけるためには、本文自身をもう少し推考しそのように訂正しなければならないであろう。この本文のままではこれを決定づけるわけにはいかないように思われる。ただ、この二つの読みについていえることは、Bの読みは、この本文全体をよく読んで、文章全体の構想の中にこの第2段落を位置づけ、多少の本文の欠陥をのり超えて、ここに第2段落の結びとして「かんそうして」を入れたと見なすことができるかも知れない。そう考えてよいならば、このBの読みは、文章全体を把握した抽象度の高い読みだといえるであろう。それに対して一方Aの読みは、よりことばの流れにすなおな、いわば文学的情感的読みの性質を多分に含んだ読みだといえるであろう。そうした意味で、Bを正答とすることはよいとして、Aを誤答とすることは、本文に欠陥があるだけに、疑問が残るのである。

なお、ここに「すい取られて」を入れたものは、「水持ちがよくないので」ということばを、排水性が大きいという普通の用法に従って、その続きとして、「水持ちがよくないので、たちまちすい取られてしまうのです。」としたのであろう。この読みでは、「つまり」という語が意味をなさないし、前文からの続きが落着かない。いわば部分のみ読んで全体を読まない、部分に捉われた読みともいってよいであろう。

そこで、本文を、「つまり、せっかく雨がふっても、さばくの土地は、水持ちがよくないので、たちまち してしまうのです。」と、読点を加えて、この部分の主語がさばくであることに気づかせるように修正し、調査問題二と同じ問題を行なってみたのが分析的問題 [I] である。その結果は次の如くであった。

[I] この文章の中の の中に、ことばを入れるとすれば、つぎのどれがよいですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○で囲みなさい。

- | | | | |
|---|--------|----|------|
| 1 | 蒸発して | 15 | (44) |
| 2 | すい取られて | 19 | (16) |
| 3 | かんそうして | 60 | (36) |
| 4 | おし流されて | 5 | (4) |

無答 1

() 内数値は、同被験者が6月調査問題実施の際の応答率である。

この修正された本文に従えば、「さばくの土地は、」をこの文の主語と見なすことによって、おのずから「かんそうして」を入れることになり、この選択肢が36%から60%に上昇したのは当然のことである。もっともこの60名のものがすべて「さばくの土地は、」を主語として受取っているとは限らないであろう。そしてまた他の40名のものは、これを主語と意識しなかったと見てよいであろう。

この被験者の6月調査問題実施の際の応答とこのたびの応答との関連を見ると表1のごとくである。調査問題で「蒸発して」を選択した44名のうち27名が「かんそうして」に移っており、もともと「かんそうして」を選択した36名については、そのうち25名が3にとどまり、11名が他へ変っている。

〔表1〕

[I] 蒸	1	2	3	4	無答	計
1	8	8	27	1		44
2	2	7	7			16
3	4	4	25	2	1	36
4	1		1	2		4
計	15	19	60	5	1	100

〔II〕 一 さばくが、「ひじょうにかんそうしていて、大地の表面が、からからにかわききっている」わけが、この文章の中に説明してありますが、それはどの部分ですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 ②段 2 ③段 3 ④段 4 ②③段 5 ③④段 6 ②③④段
- 49 2 8 25 11 4 (無答1)

さすがに②段を指摘したものは約半数ある。ところで〔I〕との関連で見ると、表2のごとくである。

〔I〕で「かんそうして」を選択した60名のうちここで②段を指摘し得たものは半数の31名に過ぎない。あとの29名のものは、この段落を文章全体の中にはっきり位置づけ得ないで読んでいることが知られる。したがって少なくともこの29名のものは、「かんそうして」をこの文章全体の中に位置づけ文脈づけて選択しているとは言えないのである。(この点31名のものは、はっきり

〔表2〕

[I] 蒸	1	2	3	4	5	6	無答	計
1	5		2	3	2	3		15
2	12		2	3	2			19
3	31	2	3	17	6		1	60
4	1		1	2		1		5
無答					1			1
計	49	2	8	25	11	4	1	100

文脈づけているものもあろうし、そうでないものもいるかも知れない。)この部分だけで、部分的読みの上から、「かんそうして」を適切としてこれを選んだものと解される。特にこの〔I〕の問題本文は「さばくの土地は、水持ちがよくないので」と本文を改訂してあるので、この部分的読みが成立し易いのである。

それでは、調査問題の本文の場合どうであるのか、このたびの被験者の6月実施の応答を、この〔II〕一との関連において、見てみると、表3のごとくである。

調査問題で「かんそうして」を選択した36名のうち、〔II〕一で②段を指摘し得たものは13名に過ぎない。他の23名は、ここに「かんそうして」を入れているにかかわらず、段落意識をもたずに、この

ことばを入れているのである。また、調査問題で「蒸発して」を選んだ44名のうち25名、「すい取られて」を選んだ16名のうち10名、「おし流されて」を選んだ4名のうち1名は、この②段を指摘しているのであるが、しかも一方これらが「かんそうして」以外のことばを選択しているのは、この部分を、文章全体の中に位置づけて段落的に読むこ

〔表 3〕

〔Ⅱ〕 識二	1	2	3	4	5	6	無答	計
1	25		1	11	5	2		44
2	10		2	2	2			16
3	13	2	4	11	4	1	1	36
4	1		1	1		1		4
計	49	2	8	25	11	4	1	100

とよりも、それぞれの部分的読みとりの意識が強くはたらい、本文の欠陥も手伝って、「かんそうして」以外の選択をしたものと思われる。つまり、子どもたちは、段落意識は段落意識として設問に応じ、部分的読みは部分的読みとして設問に応ずる。その結果文章の上でそれらが結びつかずにそれぞれ別物としてあるのである。今日の分析的技能主義的読解指導の一つの欠陥がこのような場面にその面を表わしているように思われる。文章を読むにあたって、段落意識と部分的な語句の理解は、一体となってこそ真の文章の読みといえる。語句を段落の中に位置づけ、段落を文章全体の中に位置づけつつ読みとってゆく、こうした読みの習慣を形成することが、読解力の育成にはもっともたいせつであると思う。

〔Ⅱ〕 二 ここで「さばくの土地は、水持ちがよくない」といっているのは、さばくのどういう点をさし
ていっているのですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○で
かこみなさい。

- 1 ふった雨水は、またたくまに地面にすい取られていく。 9
- 2 ふった雨水は、ものすごいはやさで水蒸気になって蒸発してしまう。 10
- 3 ふった雨水は、またたくまに地面にすい取られ、一方ものすごいはやさで水蒸
気になって蒸発してしまう。 6 6
- 4 雨がふらないときには、いくら待ってもふらないのに、ふるときには、すなや
石をおし流すほどすさまじくふる。 1 5

「水持ちがよくない」の一般的意味は、1の意味に用いられるのが普通であると思われるが、ここでは、前文を受けて、どうしても3の意味に受けとらねばならない。応答を見てもこの選択肢が66名で最も多い。ところで〔Ⅰ〕との関連で見る表4のごとくである。「かんそうして」を選んだ60名のうち、この3を選択したものは39名で、21名は他を選んでいる。この21名のものは、この文章を部分的にもよく読んでいないのでないかと思われる。

〔表 4〕

〔Ⅱ〕 〔Ⅰ〕	1	2	3	4	計
1		3	11	1	15
2	3	2	14		19
3	5	5	39	11	60
4	1		2	2	5
無答				1	1
計	9	10	66	15	100

なお、この〔Ⅱ〕二の応答を、6月施行の調査問題二の応答と対比して見ると、表5のごとくである。これで見ると、調査問題で「かんそうして」を選択した36名のうち、25名のものが正しく3を選択しており、36名のうち11名のものはこの部分を適切に読んではいなかったように思われるのである。

〔表5〕

調二 \ Ⅱ二	1	2	3	4	計
1	3	5	30	6	44
2	3	3	9	1	16
3	2	2	25	7	36
4	1		2	1	4
計	9	10	66	15	100

以上見てきたところで、問題Ⅱ一について正当な理解をもち得たものがどのくらいあったかを見てみると次のごとくである。

〔Ⅰ〕	〔Ⅱ〕一	〔Ⅱ〕二		〔Ⅰ〕において「かんそうして」を選択した60名のうち、〔Ⅱ〕一の段落の問題ができ、〔Ⅱ〕二の「水持ちがよくない」のここでの意味を把握していたと解されるものは24名であった。
1	1	3	………	3名
2	1	3	………	10名
3	1	3	………	24名

なお、6月施行の調査問題についてさかのぼって調べてみると、次のごとくであった。すなわち、調査問題で「かんそうして」を選択した36名のうち、〔Ⅱ〕一、〔Ⅱ〕二の問題を正答し得たものは11名に過ぎなかった。

調二	〔Ⅱ〕一	〔Ⅱ〕二	
1	1	3	18名
2	1	3	8名
3	1	3	11名

〔Ⅱ〕三 この文章の中には、さばくに水がない理由について、いろいろとのべていますが、それを、まとめていえば、どのようになりますか。つきの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 さばくは、雨が少ないうえかたよってふり、水持ちがわるい。 35
- 2 さばくは、雨が少ないうえに、ふった雨はすぐ蒸発してしまう。 43
- 3 さばくは、雨が少ないうえに、一年間平均してはふらない。 8
- 4 さばくは、雨が少ないうえに、ふるときはすさまじくふる。 14

調査問題 〔一〕四（19頁掲載）は「文章の要点を読み取る」ことをねらいとして出題されている。正答率は県平均2.40ではなはだ低く、県抽出10校の応答分析によれば、正答とされている選択肢1が3.11であるに対して、選択肢2が4.92となっている。これも選択肢に問題があるのではないであろうか。すなわち、正答とされている1の選択肢は、ことばがいかにもぎごちなく、この短い文の中で主語を二度変えて読みとらねばならないというような悪文である。それに対して選択肢2の方は意味がすなおにはっきり受け取れ、本文も降った雨が直ぐ蒸発してゆくと印象深く書いているので、これを選択したものの多いことはうなづけることである。それで多少でも1の選択肢が受け取り易いように、つまりその悪文を修正する意味で、四つの選択肢のいずれにも「さばくは、」ということばを最初につけて出してみたのが、この分析的問題Ⅱ三である。

その結果は数値の上では、調査問題と大体同じ傾向ではほとんど違いを生じなかった。しかし内容的にはそこにかんがりの移動が見られた。表6のごとくである。調査問題で1を選択したものは、この度の分析的問題では2へかなりの移動を見せた。2を選択したものは、この度1と4へかなりの移動をみせている。調査問題で3と4を選択したものは、この度はその大部分が他へ移動した。しかしこれは、その内容から見て、「さばくは」ということばを冠したために起った変化とは必ずしも認めがたい。むしろ子どもの、その時々による読みの不安定性に由来すると見た方が、事実に近いのではないと思われる。

表 6

(II) 三 調四	1	2	3	4	計
1	19	8	3	2	32
2	6	28	1	6	41
3	4	2	1	2	9
4	6	5	3	4	18
計	35	43	8	14	100

たゞ、やゝ興味深く思われるのは、(II)一との関連である。表7に見るごとく、(III)三で1を選択したものの35名の中23名まで、(II)一で1を選んだものである。つまり(III)三で1に回答したものは、その66%が、この本文の②段落をはっきり全文の中に位置づけて、段落意識をもって読みとっていたものであることである。

表 7

(II) 一 (III) 三	1	2	3	4	計
1	23	19	2	5	49
2		1		1	2
3	2	5	1	2	8
4	5	15	3	2	25
5	4	5		2	11
6	1		1	2	4
無答			1		1
計	35	43	8	14	100

また、この(II)一で1を選択したもの、つまり②段を全文の中に位置づけて内容的に読みとっていたもののうち47%が(III)三で1を選び、39%が2を選んでいることになる。この点から見て、この問題は、第2段落の要点を読み取るというような設問にするならば、1への回答はかなりふえたのではないかと考えられる。

なお、調査問題と(II)一との関連を見てみると、表8のごとくであって、表7と大体同じ傾向を示している。ただ、(II)一の段落の読みと1の選択肢との関係がやゝその占める%が下回るといだけである。そしてこのことは、それだけ選択肢2への回答率を高めている。このことは、②段落の意味内容を把握していても、なおかつ選択肢2にひかれるという、それだけ選択肢1が悪文であったためではなからうか。それが分析問題よりも調査問題で選択肢1と(II)一の段落意識の問題の関連がやゝ薄れている原因でないかと思うのである。

表 8

(II) 一 調四	1	2	3	4	計
1	18	19	4	8	49
2	1	1			2
3	3	3	1	1	8
4	5	14	2	4	25
5	4	5	2	2	11
6	1	1		2	4
無答				1	1
計	32	41	9	18	100

たゞいずれの問題も、選択肢1よりも2の方が回答率の高いことは、さきにも述べたように、問題本文の表現そのものと、設問と選択肢の対応、選択肢の表現の拙劣さによるものと考えられる。

以上(II)一、二、三の問題をした後に、もう一度〔I〕と同じ問題を行なったのが(II)四の問題である。

〔II〕 四 つぎの問題は、前にもしましたが、もう一度本文をよくよんで、答えてください。答えは、前
のときのとかわってもかまいません。

この文章の の中に、ことばを入るとすれば、つぎのどれがよいですか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 蒸^{じょう}発して 16
- 2 すい取られて 19
- 3 かんそうして 61
- 4 おし流されて 4

実は、この分析問題を作った時の予想では、6月実施の正答率から考えて〔I〕の正答率は当然低いものと予想した。それで、〔II〕一二三の問題を行なうことによって、被験者はそこに読解上の何等かの示唆と読みの深まりを得て、この四の応答で正答率が上昇するであろうと考えた。ところが〔I〕の問題で、60%の正答率が出てしまっているのです、その変化は余り期待されないものとなった。事実数値の上でその変化はほとんど見られない。しかし内容的には、表9に見られるように、かなりの移動が見られるのである。

〔II〕で「かんそうして」を選んだ60名のうち、〔II〕四でもこれを選んだのは43名である。17名は他へ移った。またIにおいて他の選択肢をとっていたものが、〔II〕四で「かんそうして」を選んだものは18名である。これらがどうして変化したかについて納得のいく説明はできかねるようである。いま〔I〕一二三の応答を整理してみると次のごとくである。(表10)

表 9

I \ II 四	1	2	3	4	計
1	5	1	9		15
2	2	9	8		19
3	8	7	43	2	60
4	1	1	1	2	5
無答		1			1
計	16	19	61	4	100

表 10

〔Ⅰ〕 → 〔Ⅱ〕四	(人数)	〔Ⅱ〕一						無答
		1 ②段	2 ③段	3 ④段	4 ②③段	5 ③④段	6 ②③④段	
1 蒸発して → 1 蒸発して	(5)	2			1		2	
2 すい取られて → 1 蒸発して	(2)	2						
3 かんそうして → 1 蒸発して	(8)	6			1			1
4 おし流されて → 1 蒸発して	(1)			1				
1 蒸発して → 2 すい取られて	(1)					1		
2 すい取られて → 2 すい取られて	(9)	6			2	1		
3 かんそうして → 2 すい取られて	(7)	2		2	3			
4 おし流されて → 2 すい取られて	(1)						1	
無 答 → 2 すい取られて	(1)					1		
1 蒸発して → 3 かんそうして	(9)	3		2	2	1	1	
2 すい取られて → 3 かんそうして	(8)	4		2	1	1		
3 かんそうして → 3 かんそうして	(43)	22	1	1	13	6		
4 おし流されて → 3 かんそうして	(1)				1			
3 かんそうして → 4 おし流されて	(2)	1	1					
4 おし流されて → 4 おし流されて	(2)	1			1			
(計)		49	2	8	25	11	4	1

たとえば、〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕四が、「かんそうして」から「すい取られて」に変わったもの7名についてみると、そのうちの2名は、〔Ⅱ〕二で1を選択している。つまり、「水持ちがよくない」のここでの意味を、「ふった雨水は、またたくまに地面にすい取られていく。」と受け取っている。その結果、最初は「かんそうして」を入れていたにかかわらず、〔Ⅱ〕の問題を経過したために、「すい取られて」をよしとするに至ったものと推測される。これも単なる推測の域にとどまって、ほんとうのことはよくわからないのである。7名のうち他の5名については、この調査からはなぜ変わったのか、なんの根拠もつかない。こうしたことは、〔Ⅰ〕で他の選択肢を選び〔Ⅱ〕四で「かんそうして」を選んだものについても、同様に、その理由をはっきり推測することは困難である。そういう点では〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕四と共に「かんそうして」

〔Ⅱ〕 二				〔Ⅱ〕 三				〔Ⅰ〕	〔Ⅰ〕
1	2	3	4	1	2	3	4	一一三	一一三
すい取られて	蒸発して	すい取られ 蒸発して	おし流す	水持ちが わるい	蒸発して しまう	平均して ふらない	すさまじ くふる	1 3 1	1 3 2
	1	4		1	1	1	2	1	
		2		1	1			1	1
	2	5	1		4	2	2		3
			1				1		
		1		1					
1	1	7		5	2		2	3	
2		5		2	3	1	1	1	
1			1			1			
							1		
	2	6	1	4	4		1	2	
2	1	5		3	4	1		2	1
2	3	29	9	15	23	2	3	9	8
		1		1					
			1	1	1				
		1	1	1			1		
9	10	66	15	35	43	8	14	19	13

を選択した43名について見ても、その〔Ⅱ〕一三の選択のあとをたどってみると、必ずしもそれらの選択が一直しておらず、なぜ「かんそうして」を選んでいるのか、はっきりわからない。その半数以上は、本文への正確な理解の上に立ってこれを選択したとは言えないように思われる。

この問題本文をある程度深く理解してその上で「かんそうして」を選んでいると見られるものは、43名のうち、恐らく、〔Ⅱ〕一三の選択をそれぞれ131、もしくは132を選択した17名のものと見なしてよいであろう。同様に、〔Ⅱ〕一三の問題を経過したために、そこから読みが深まり、他から「かんそうして」に移ったと見られるものは、「蒸発して」から「かんそうして」に移った9名のうち〔Ⅱ〕一三で131を選んだ2名、「すい取られて」から「かんそうして」に移った8名のうち〔Ⅱ〕一三

を131、もしくは132を選んだ3名、この5名である。してみると、『四で「かんそうして」を選択した61名のうち、ほんとうにわかって、本文の読みに裏づけられて選んでいると見なされるものは、以上の17名と5名、22名と考えてよさそうである。そしてまた、「蒸発して」を選んだ16名、「すい取られて」を選んだ19名のうち、[II]一二三を131、132と選択している10名は、この問題本文の理解は相当しっかりしていると思うけれども、この部分の文脈の理解に「蒸発してしまう」あるいは、「すい取られていく」（もしくは「水持ちがよくない」）という言葉の印象が強く作用した結果、こうした部分的誤りに陥ったものと考えられる。

以上、調査問題 [一] 二を中心に四にも触れながら、その応答を分析してきたのであるが、この「文脈の中の語句の意味を考える」ということは、単に部分的文脈の中で捉えるだけでなく、文章全体の大きな文脈の中に位置づけて語句を理解するということが、極めて大切であることが知られる。このことは文章の読解という点で極めて重要なことで、読解指導上じゅうぶんに注意しなければならない問題である。

またこの分析途上たいへん問題だと思うことは、子どもの応答が、それぞれの設問に場あたりの反応し、その応答に一貫性がないことである。これは問題本文に対する自分の読みというものを確立せず、文章の読みを土台としていないところからきていると思われる。こうした読みの断片性や不安定性あるいは直覚的思考傾向は、単に〇×式調査にあらわれる特殊な現象ではなく、今日の国語学習の課題解決的学習や技能主義的学習によって形成された一つの傾向ではないかと思われる。あるいは更に、こうした傾向は現代社会の、飛躍的な科学の発展に基づく現代の一般的思考傾向だといえるかも知れない。しかしながら、言語というものは、そうした直覚されたものを、脈絡づけ文脈づけて表現し、文脈的に理解するものであって、そこにこそ読解指導の本質的な使命があるといわねばならない。そうした意味において読解指導は有機的統一をもった文章の読みの育成に、じゅうぶん留意する必要があると思う。

(2) 調査問題 [二] 一

[二] 本文 分析問題 [三] 本文参照 (ただし、冒頭数行における傍線及びアイウエオの記号は、調査問題にはない。)

一 この文章の中の◎をつけた部分を読んでうける感じとして、いちばんよいのはどれですか。

- | | | |
|---|---------------------------|----------------------|
| 1 | 子がにという小さな生きものの、かたちのおかしさ | (12.4) |
| 2 | はさみをたえず動かしている子がにの、おちつきのなさ | (21.5) |
| 3 | 小さいながらもいのちのある子がにの、いじらしさ | (40.4) [35.2] [38.2] |
| 4 | ビーズ玉のような小さな目をもった子がにのふしぎさ | (24.9) |
| | | (無答 0.9) |

() 内数値は、県抽出10校の応答分析結果による応答率。[] 内数値は、全县平均正答率。同じく太字は全国平均正答率。

この調査問題一は、「情景を読みとる」ことがねらいとされている。そして3が正答肢とされている。

この問題は「文脈の中の語句の意味を考える」ことが、ねらいとされている。県抽出10校の応答分析の結果を見ると、2の選択肢「海べへいこう。」への反応がかなり高い。(31.9%)、そこでその原因を考えてみると、第一にこの「海べへ。」ということばを、この文章の文脈の中に位置づけずに、このことばだけを切り離してその意味を答えたのではないか。第二に、たとえこのことばを文脈の中に位置つけて解した場合でも、「海べへ。」の意味は、「海べへいこう?」と聞きかえしたことばであり、この2の選択肢をとっても、これを誤りとはいえないように思われる。したがってこの2の選択肢を選んだものがどんな気持ちでこれを選んでいるのか、その内容を吟味してみる必要がある。以上のような点から次の分析問題を作ってみた。

Ⅱ (1) 「海べへ。もう暗くなってしまったじゃないか、ふき。」

この「 」の前後の文章をよく読んで、この「海べへ。」ということばが、どのような意味に使われているか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 海べへいってはいけない。 10 (13)
- 2 海べへいこう。 19 (27)
- 3 海べへいきたいんだね。 21 (21)
- 4 海べへいくんだって。 49 (39)

(無答) 1

○ また、右の「海べへ。」ということばは、どんな気持ちをあらわしているか。つぎの中からいちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 人をさそう気持ち 25
- 2 意外に思ってたずねようとする気持ち 42
- 3 とめようとする気持ち 22
- 4 同情する気持ち 11

()内数値は、同被験者が、6月調査問題実施の際の応答率である。

まず、「海べへ」ということばだけを切り離して応答しないように、この文章の中での意味として答えるよう、問いかけのことばを修正して出した。その結果は2の応答が減って4の応答がふえた。予想したように、調査問題ではこのことばを文章から切り離して単独にその意味を答えていたものが、かなりあったものと推測される。この度の被験者が6月調査問題に対して示した応答と、この修正された分析問題の応答を対比してみると表14のごとくである。

調査問題で1および2に回答したものが、その半ば近く4に移動した。ただ3の回答者はこのたびはかなり1へ移動しているのが目立つ。

次にそれぞれの選択の内容を吟味すべく、その気持ちを問うた○の問題で、前問題との関連を見ると、表15のごとくである。Ⅱで1「海べへいってはいけない。」という選択肢は、気持ちとしては3「とめようとする気持ち」に対応する。この気持ちはこの文章のこの場

調二	Ⅱ二	1	2	3	4	無答	計
1		3	3	1	6		13
2			9	6	12		27
3		6	3	10	2		21
4		1	4	4	29	1	39
計		10	19	21	49	1	100

この【Ⅱ】の問題に関連して次の二つの問題を行なってみた。

○ あなたがそのように感じたのは、この文章のどの部分ですか。左の番号を○でかこみなさい。
(一つでもよいし、二つ以上でもよい。)

ア	イ	ウ	エ	オ	(無答)
11	23	24	53	47	1

【Ⅲ】の選択との関連で見ると表 12 のごとくである。(一つでも二つでもよいとじているので計は100をこえる。
()内数値は【Ⅲ】の選択者である。)

表
12

【Ⅲ】 ○	ア むずむず 足を	イ ビーズ玉、 光って	ウ なにかを 見つめて	エ 大きなは さみ	オ ぶるぶる ふるわす	無答	計
1 かたちのおかしさ	3	2		3	3		11 (7)
2 おちつきのなさ	3	2	3	16	23		47 (32)
3 いじらしさ	5	10	19	29	19	1	83 (49)
4 ビーズ玉、ふしぎさ		9	2	3	2		16 (10)
無 答				2			2 (2)
計	11	23	24	53	47	1	159 (100)

これを見ると、2「はさみをたえず動かしている子がにの、おちつきのなさ」を選択していたものが、エ、オ、(つづけて指摘しているもの8名いる)を指摘しているのは当然であり、4「ビーズ玉のような小さな目をもった子がにのふしぎさ」を選択していたものが、イを指摘しているのも、これもまた当然のこととうなづける。正答と見なされている3「小さいながらもいのちのある小がにの、いじらしさ」を選択していたものは、イウエオと分散しているが、実際にどのような指摘を行なったかを見ると、次のごとくである。

エ(8)、エオ(8)、ウエ(5)、ウオ(5)、オ(4)、ウ(3)、イウエ(3)、イ(2)、
イエ(2)、イラ(2)、アエ(2)、ア(1)、アウ(1)、アオ(1)、イエオ(1)、ム(1)
ウ、エ、オに集中度が高いのであるが、これらの部分をこの子どもたちがどのように読みとっていたかは、次の問題の結果から見ると、はなはだ疑問なのである。

○ 右の 3小さいながらもいのちのある子がにの、いじらしさ 中の「いじらしさ」ということばの意味に、いちばん近いと思うのは、つきの中のどれか。一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- | | |
|------------------------------|----|
| 1 心細げな、いじけた、どことなく元気のないようす | 14 |
| 2 意志が強く、どこかどうじょうなところのあるようす | 45 |
| 3 おさなくてかわいそうに見え、いたわってやりたいようす | 28 |
| 4 いきいきとして、あかるく元気なようす | 13 |

調査問題ならびに〔Ⅱ〕の正答肢と見られる 3 の中の「いじらしさ」ということばの意味を問うてみたのである。この正答と見られる 3 を選択したものはわずかに 28 名であった。語いの知識のないことが痛感される。2 の選択肢が選択率の高いのは、おそらく「いじらしさ」ということばから「いじわる」「いじっぱり」等の語を連想したのではあるまいか。いまこの応答を〔Ⅲ〕の選択と関連させてみたのが表 13 である。

表 13

〔Ⅲ〕	1	2	3	4	計
1		4	2	1	7
2	5	14	10	3	32
3	8	21	12	8	49
4	1	5	3	1	10
無答		1	1		2
計	14	45	28	13	100

いま〔Ⅲ〕の正答肢と見なされる 3 を選択した 49 名について見ると、その中、「いじらしさ」という語を正當に受け取っていたものはわずかに 12 名で他の 37 名のもは全く別な意味にとっていたのである。特にそのうち最も多い 21 名のもは「意志が強く、どこかどうじょうなところのあるようす」という、まさに反対の意味に受け取っていたわけである。もちろん、これまでもしばしば見てきたように、子どもがこの問題をする時には、前の問題とは全然関係なしに、ただ「いじらしさ」の意味として応答している者が大部分かと思われるが、「いじらしさ」ということばの理解がそのようなものであるとするならば、この 21 名のもは、本文の「なにかを見つめているように思われました」（前問のウ）のところに眼光炯々として前方をにらんでいる様子を感じていたのかも知れないし、「そんなちっちゃな子がにでも、からだにふにあいなほどの、大きなはさみをもっているのです。」（同じくエ）、「子がにはそのはさみを、ぶるぶる、ふるわすように、たえず動かしているのです。」（同じくオ）のときには、相手を威嚇している姿を想像していたのかも知れないと思われる。こうなると調査問題ならびに〔Ⅲ〕の選択肢 3 は正答とは言えなくなってくる。〔Ⅲ〕について言えば実は 49 名ではなくその中の 12 名が正答者だったということになる。また〔Ⅲ〕で 2 を選択した 32 名の中 14 名はやはり「いじらしさ」を「意志が強く、どうじょうなところのあるようす」と受け取っているわけであるが、それなればこそ 3 の選択肢を捨てて 2 の選択肢「はさみをたえず動かしている子がにの、おちつきのなさ」を選択したのだとも言える。だとすれば、その子がにの不安な気持ちに感情移入している点、前者の 21 名よりは遙かにこの文章を味わい理解していたといつていい。とにかくこの調査問題〔Ⅱ〕の正答率は 35.2 となっているが、この分析調査の結果から考えると、内容的には甚だおかしなものといわねばならない。

③ 調査問題 〔Ⅱ〕 二

二 この文章の中の「海べへ」の意味に、いちばん近いのはどれですか。

- 1 海べへってはいけない。 (7.1)
 - 2 海べへいこう。 (31.9)
 - 3 海べへいきたいんだね。 (18.6)
 - 4 海べへいくんだって。 (41.8) [38.2] [44.5]
- (無答 0.6)

() 内数値は、県抽出 10 校の応答分析結果による応答率。[] 内数値は、全県平均正答率。同じく大文字は全国平均正答率。

ところで、この◎の部分だけを読んで、3を正答と限定しうるであろうか。ここを読んだ時、恐らく子どもは、ビーズ玉みたいな小さな二つの目や、からだにふにあいな大きなはさみに、生き生きした感興を覚えながら読んだことと思う。そうして読み進む中に、この物語全体の気持ちや構想の中に、子がこのこの場面の様子がある意味をもって心の中に把握される。その時始めて3の選択肢が意味をもってくる。したがって◎の部分を読みどの段階でおさえるかによって、おのずから答えが変わってくると思われる。調査問題では、本文の前に、一括して、「つぎの文章を読んで、あとの一から五までの問いに答えなさい。」とあるから、この一の問題はこの物語全体を読み終えた段階で◎の部分からどのような感じを受けるかを問うているものと思われる。しかしこの点が子どもには明確に受けとれず、直接◎の部分だけから応答しているものが多分に含まれていると思われる。そこで分析問題では、文章全体の中にこの部分を位置づけて読みとるように、次のように、設問の問いかけのことはを少しく修正して、もう一度同じ選択肢で行なってみた。

〔Ⅱ〕

一 この文章全体を読んで、◎をつけた部分に、あなたはどのようなことをいちばん強く感じますか。つぎの中から一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 子がにという小さな生きものの、かたちのおかしさ 7 (18)
 - 2 はさみをたえず動かしている子がにの、おちつきのなさ 32 (23)
 - 3 小さいながらもいのちのある子がにの、いじらしさ 49 (39)
 - 4 ビーズ玉のような小さな目をもった子がにのふしぎさ 10 (19)
- 無答 2 (1)

()内数値は、同被験者が6月調査問題実施の際の応答率である。

その数値に表われたところを見ると、子がにの形態への関心を表わした1、4の選択が減って、子がにの状態を主とした、多分に心情的捉え方をしている選択肢2、3の選択が増している。これはこの分析問題の意図からいって、予想通りの結果を得たわけである。いま被験者の6月に行なった調査問題の応答との移動を見てみると、表11のごとくで、調査問題で1、4を選んだものは約その7割が選択肢2と3へ移動している。また調査問題で2を選択したものは3へ、3を選択したものは2へ移動したものが5割ないし3割あるのである。このように移動の著しいことは一面〔一〕でも述べたように読みの不安定性によるところがあると思われるが、とにかく選択肢2と3の選択が62名から81名に20%近く増したことは、問いかけのことはの修正によるものと見てよいであろう。

表 11

調査問題	1	2	3	4	無答	計
1	3	6	8	1		18
2	3	7	11	2		23
3	1	12	23	2	1	39
4		6	7	5	1	19
無答		1				1
計	7	32	49	10	2	100

面での気持ちとしては、
「もう、暗くなってしまう
ったじゃないか、ふき。」
ということばに続くこと
ばとして、このことばを
強く受け取った解釈とい
える。全体では22名と
いうかなりの反応を見た。

表
45

(II) 二 \ 〇	1 さそう	2 たずねる	3 とめる	4 同情する	計
1 いってはいけない	1	3	5	1	10
2 いこう	12	1	4	2	19
3 いきたいんだね	6	8	1	6	21
4 いくんだって	6	29	12	2	49
無 答		1			1
計	25	42	22	11	100

(II)で1を選んだ10名については、その半数5名がこれを選択している。)次に問題の2「海べへいこう。」は気持ちとしては「人をさそう気持ち」に対応する。19名のうち12名までこれを選択している。全体としては25名あるが、これは「海べへいこう」ということばを、どこまでも語としての意味と気持ちとして応答したものと言えよう。[II]二で3や4を選択しているものが、それぞれ6名もこれを選んでいるが、これらは、おそらく、前の選択とは無関係にこの問題で反応したものと思われる。

[II]二3「海べへいきたいんだね」に対応するものは4「同情する気持ち」であるが、II二で3を選択したものは1, 2, 4へ分散した。この「海べへいきたいんだね。」という把握は、この場面としてはやや無理であろう。もっとも「海べへ。」という表現の中にこうした気持ちを受取ることは、必ずしも不可能という訳ではない。[II]二4「海べへいくんだって」これに対応するのは2「意外に思ってたずねようとする気持ち」であり、49名のうち29名がこれを選択している。全体としても42名がこれを選択している。

[II]二の4の応答者(調査問題で正答肢とされるもの)49名のうち、29名のものが調査問題の趣旨にそった正解者といえよう。しかし、その他のものも、ニュアンスの違いこそあれ、必ずしも誤答と言いついていいかどうかは問題である。2「海べへいこう。」を選んだものも、「海べへいこう?」と解したとすれば、必ずしも「海べへ」の語いを文脈から離れてのみ解したとは言えない点もあり、1「海べへいってはいけない。」にしても、「海べへいきたいんだね。」にしても、全然否定し去ることはできないように思われる。おそらく子どもたちがこの場面に描いた父親のイメージによって(それは多分に子どもの体験している父親のイメージによるであろう。)もたらされる違いではないかと思われる。そしてそれは、実際にこの「海べへ。」を発言する時の語調の違いをもたらすであろうと思われる。

(4) 調査問題 [二] 四

四 この文章の中の(3)「おとうちゃん。」「おい。」……………かたりあいました。に、父と子のどんな気持ちがあらわれていますか。

- 1 子がにを海へはなしてやって満足した気持ち。(65.0) [56.7] [58.0]
 - 2 子がにを海へはなしたあとのさびしい気持ち(21.2)
 - 3 親のもとにかえった子がにをうらやむ気持ち(9.9)
 - 4 子がにを海へはなしたのをさんねんに思う気持ち(3.4)
- (無答 0.6)

()内数値は、県抽出10校の応答分析結果による応答率。〔 〕内数値は全県平均正答率。同じく赤字は全国平均正答率。

この問題は、「心情を読みとる」ことをねらいとしている。この問題は、この文章の終末部分での父と子の気持ちを問うたものであり、この文章全体の読み、特にその作品主題に迫る問題を含んでいる。こうした点からその選択肢を見ると、3、4は、明らかに誤答と見なされようが、1と2はともにこの場面の気持ちとして含まれている気持ちであると思われる。ただ父と子の気持ちとして父子を一まとめにしてその気持ちを指摘させる点で1を正当としているのであろうが、「子がにを海へはなしてやって満足した気持ち」というのでは、この場面の気持ちとしていかにも大まかな捉え方であり、その「満足した気持ち」といっている内容を、さらに「心情を読みとる」という立場から吟味したのが次の分析问题である。

まず調査問題をそのままもう一度行ない、次にふきのことばと父のことばを手がかりに、その時の父子の気持ちをそれぞれにきいてみて、それらの関連を考えてみたのである。

〔II〕三 この文章の中の、⁽²⁾「おとうちゃん。」「おい。」……………かたりあいました。に、父と子のどんな気持ちがあらわれていますか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- | | | | |
|---|------------------------|----|------|
| 1 | 子がにを海へはなしてやって満足した気持ち | 56 | (62) |
| 2 | 子がにを海へはなしたあとのさびしい気持ち | 33 | (28) |
| 3 | 親のもとにかえった子がにをうらやむ気持ち | 8 | (8) |
| 4 | 子がにを海へはなしたのをさんねんに思う気持ち | 2 | (2) |
| | 無答 | 1 | |

()内数値は、同被験者が、6月調査問題実施の際の応答率である

6月の調査とこの度の調査の結果の関連を見ると表16のごとく1→2への移動と2→1への移動が目立つ。このことはこの1と2の選択肢にどっちも片付けがたいものがあったのでないかとも思われる。結果的には、1がやや減少し2がややふえたことになる。

表 16

〔II〕三 調四	1	2	3	4	無答	計
1	46	13	2		1	62
2	9	14	3	2		28
3	1	4	3			8
4		2				2
計	56	33	8	2	1	100

〔IV〕本文をもう一度読んでから、つぎの問いに答えなさい。

一 この文章のおわりの部分で、「かに、海へ、はなしてやったよ。」といったとき、ふきは、どんな気持ちだったでしょうか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- | | | |
|---|---------------------------|----|
| 1 | 子がにを海へはなしてやったことに満足している | 27 |
| 2 | 子がにを海へはなしたあとのさびしさをあじわっている | 29 |

- 8 親のもとにかえった子がにをうらやんでいる。 3
 4 親のもとへかえる子がにのしあわせを思いやっている 4 1

二 「ああ、よかったね。」といったとき、父親は、どんな気持ちだったでしょうか。つぎの中から、いちばんよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 暗い海岸で無事に子がにを海へはなしてやったのを見て安心した気持ち 3 0
 2 一びきの子がにの命を救ってやった子どものおこないを喜んでいる気持ち 4 2
 3 子がにを海へはなしてやった子どもの気持ちをいつくしんでいる気持ち 1 6
 4 子がにを海へはなしたあとのさびしさをまぎらわそうとする気持ち 1 2

いま、(II)三の回答者がIV一でどのような回答をしているかを見ると、表17のごとくである。

(II)三で1「子がにを海へはなしてやって満足した気持ち」を選択した56名について見ると、(IV)一では、その25名が1「子がにを海へはなしてやったことに満足している。」を選んでいるが、2「子がにを海へはなしたあとのさびしさをあじわっている。」に10名、4「親のもとへかえる子がにのしあわせを思いやっている。」に21名選択している。(III)三で父と子の気持ちとして一からげに「子がにを海へはなしてやって満足した気持ち」として捉えたものも、ふきの気持ちとして問うて

表 17

(II)三 \ (IV)一	1	2	3	4	計
1	25	10		21	56
2	1	15	1	16	33
3	1	3	1	3	8
4		1	1		2
無答				1	1
計	27	29	3	41	100

見るとこのように別れてくるのである。そしてそこにはそれぞれの心情の読み取りのニュアンスの違いが見られるのである。(III)三で2「子がにを海へはなしたあとのさびしい気持ち」として捉えたものも、(IV)一では2と4に約半数ずつ別れている。全体としては、4「親のもとへかえる子がにのしあわせを思いやっている。」が最も多く、2「さびしさをあじわっている」、1「満足している」の順になっている。この場合のふきの気持ちとしてはこの三つの気持ちがともに入り混っていたと思われるが、透えていうならばその割合はまさにこの数値に見られるような割合であろうと思われる。

次に、(II)三の回答者がIV二でどのような回答をしているかを見ると表18のごとくである。

この(IV)二の問題は、選択肢1, 2, 3の間にやや弁別性が乏しく、また特に3の選択肢の中の「いつくしむ」ということばが子どもに身近なことばでないため、明確な結果が必ずしも出ていないようであるが、その読み取りのニュアンスの違いはそこに見られると思う。

表 18

(II)三 \ (IV)二	1	2	3	4	計
1	18	26	6	6	56
2	7	11	9	6	33
3	3	4	1		8
4	2				2
無答		1			1
計	30	42	16	12	100

(II)三で、1「子がにを海へはなしてやって満足した気持ち」を選んだもの56名について見ると、(IV)二では、2「一びきの子がにの命を救ってやった子どものおこないを喜んでいる気持ち」を選択しているのが26名で約半数である。次に多いのが1「暗い海岸で無事に子がにを海へはなしてやったのを見て安心した気持ち」の18名である。この1の選択肢は、子どもが無事であったので安心したと解するものと、子がにを無事に海に帰してやれて安心したと解するも

のことが含まれている。(実は、後に自由記述で、父がどのような気持ちでこのことばを言ったのかを、別な被験者で調査したところでは、前者のように受け取れる応答はごく少なく、後者のように受け取れる応答がかなりの数見られた。〔全体の22%〕3「子がにを海へはなしてやった子どもの気持ちをいつくしんでいる気持ち」と4「子がにを海へはなしたあとのさびしさをまぎらわそうとする気持ち」はそれぞれ6名である。この3、4の選択肢は、ともに子どもの気持に対する父親のいたわりの気持を内容としているもので、心情の読み取りとしてはある深さをもったものであるが、この選択はわりに少ないのである。

次に、ⅢⅢで、2「子がにを海へはなしたあとのさびしい気持ち」を選択した33名について見ると、前述の56名の選択傾向とは異なり、4つの選択肢に分散している。特に3「子どもの気持ちをいつくしんでいる気持ち」の選択が相当に多い(9名)ことが目立っている。

この「ああ、よかったね。」という父親のことばは、「かに、海へはなしてやったよ。」というふきのことばを受けて、その行為を是認しねぎらう意を表出したもので、ふきの気持ちへの同感といたわりともいうべき父親の深い愛情に充ちたことばである。したがって、選択肢2の「子どものおこないを喜んでいる気持ち」というのは、「ああ、よかった」という、ことばの意味上の読み取りに基づいた、ごく素朴単純な読み取りであって、内容的にこの場面の心情を深く読み取るならば、3の選択肢「子がにを海へはなしてやった子どもの気持ちをいつくしんでいる気持ち」を中心に、1、2、4の選択肢の気持ちもそこに入り混っているのがこの時の父の気持ちと解していいであろう。ただそのうち4の感じ方は情緒的傾向が強く、2の受け取り方は、さきに触れたように、やや表面的理知的傾向の読みだと言えよう。

いま、Ⅳ一とⅣ二の関連を見ると、表19のごとくである。さて、このⅣ一と二の組み合わせについて、内容的に考えると、次のように類別することができるかと思う。もちろんこれは筆者の主観によって類別するので、違った見解もあると思うが、おおよその傾向はでていると言えるであろう。()内数値は人数。

表 19

Ⅳ一 \ Ⅳ二	1	2	3	4	計
1	8	15	4		27
2	9	8	3	9	29
3	1	1	1		3
4	12	18	8	3	41
計	30	42	16	12	100

	Ⅳ一-Ⅳ二	Ⅳ一-Ⅳ二	Ⅳ一-Ⅳ二
a. 情情的読み取りの深いもの	4-3 (8)	2-3 (3)	
b. 情情的読み取りの一応できてきているもの	1-1 (8)	4-1 (12)	4-2 (18)
c. 情緒性の強い読み	2-4 (9)	4-4 (3)	
d. 理知的傾向の読み	1-2 (15)		
e. ふきのことばと父のことばの受け取り方に、ややチグハグな感のあるもの	1-3 (4)	2-1 (9)	2-2 (8)
f. 矛盾した誤れる読み	3-1 (1)	3-2 (1)	3-3 (1)

次にこれをⅡ三の選択に対応させると表20のごとくである。

	Ⅳ 一 二	Ⅲ 三					
		1	2	3	4	無答	
a. 情情的読み取りの深いもの	4-3 2-3	3	4 3	1			8 } 3 } 11
b. 情情的読み取りの一応できているもの	1-1 4-1 4-2	8 6 11	5 5	1 1		1	8 } 12 } 18 } 38
c. 情緒性の強い読み	2-4 4-4	5 1	4 2				9 } 3 } 12
d. 理知的傾向の読み	1-2	14		1			15
e. ふきのことばと父のことばの受け取り 方にチグハグな感のあるもの	1-3 2-1 2-2	3 4 1	1 2 6	2 1	1		4 } 9 } 8 } 21
f. 矛盾した誤れる読み	3-1 3-2 3-3		1	1	1		1 } 1 } 1 } 3
		56	33	8	2	1	100

この表で見ると、Ⅱ三で1を選択したもの必ずしも情情的読み取りが深いとはいえないので、むしろ2を選択したものに情情的読み取りの深いものが相当数あることが知られる。こうした点から見て、調査問題が、「心情を読み取る」ことをねらいとしながら、その処理に当って選択肢1を正答とし、したがって選択肢2を誤答と見なすのはどういうものであろうか。（選択肢3、4は明らかに誤答と見なしてよいであろう。）本来こうした心情を読み取るというようなことは、正しいか誤りかというような立場で評価すべきでなく、深いか浅いかを問題にすべきである。このような問題に一つだけの正答を設けることはおかしいことであると思う。かりにその正答肢が一般妥当性をもったものであるにしても、内容的に見てゆくと、そこには心情の読み取りの深浅各様の段階が含まれていることが、以上の分析調査からも、わかるのである。文章読解において心情の読み取りを問題にするならば、まさにそうした心情の読み取りの深浅こそ問題にすべきであると思う。そしてそれは一つを正答とし他を誤答であると見なすような評価のし方では評価し得ない問題ではないかと私は思うのである。

2. 中学校才藝学年

(1) 調査問題 [1] 5

[1] 本文 分析問題 [1] 本文参照 (ただし、各段落の冒頭に最初から順次①②③④⑤⑥⑦の記号が付してある。

5 この文章の全体(①から⑦まで)を、意味のうえから考えて、四つに分けるとすれば、次のどれがよいか。

- | | | | | |
|---|--------------------------|---------|---------|---------|
| ア | [①] と [②] と [③④⑤⑥] と [⑦] | (3 5.5) | [3 2.6] | [3 5.4] |
| イ | [①] と [②] と [③] と [④⑤⑥⑦] | (7.1) | | |
| ウ | [①] と [②③] と [④⑤⑥] と [⑦] | (3 0.2) | | |
| エ | [①②] と [③④] と [⑤⑥] と [⑦] | (15.4) | | |
| オ | [①②③] と [④] と [⑤] と [⑥⑦] | (1 1.3) | | |

() 内数値は、県抽出10校の応答分析結果による応答率。[] 内数値は、全县平均正答率。同じく太字は全国平均正答率。

この調査問題は、「文章の構成を読み取る力」が出題のねらいとされている。ここではこの文章が4段落に切られている。そしてそのいろいろな切り方を比較検討してその最も妥当なものを選ぶという形の出題になっている。いまその選択肢を見ると、この文章の結びの⑦の段落を独立させていないもの(イ、オ)あるいは一続きのまとまりである④⑤⑥を分断しているもの(エ、オ)がよくないことはすぐわかる。応答結果から見ると、アとウがともに30%を超しており、アとウのいずれを選ぶかに問題があるように思われる。この二つの選択肢を比べて見ると、③の段落を前に付けるか後に付けるかの違いである。この③の段落をこの文章でどう位置づけるかということは異論のあるところであろうと思われる。すなわち、①②③を続けて、ここまですべてをこの文章の本論に入る前の序段と見ることもできよう。また、③④⑤⑥と続けて一かたまりと見ることもできよう。この方がわかり易いと思うが、ただこの場合には②段が文章構成上ややあいまいにならざるを得ない。ほんとうのことを言うと、この文章は、①段で「マール＝アチが議論の花が自由に咲き競う場所であることを言い、②段でさらにその様子を説明している。そして③段で①②段を受けて特に①段の終りの「……ほんとうの意味での「言論の自由」の尊さを味わいた。」ということばを受けて「……理論としてよりも体験として確認しえたのである。」と結んでいるのである。そして、しかも一方、三つの条件を確認しえたとして、次の④⑤⑥段を呼び起すものとなっている。つまりこの③段は前段を受けてこれを結ぶと同時に、後段への展開の冒頭をなしているのである。文章をただ平面的に段落に切ったのでは説明しにくいところである。ところで、問題のウの選択肢は [①] と [②③] となっているので、これはよくないと思う。 [①②③] とまとめれば前述のごとく成立すると思うが、これではこの文章全体を3段に切ることになるので4段切れにはならないことになる。 [①②] と [③] と [④⑤⑥] と [⑦] という切り方が考えられてよいと思うのだが、これは選択肢としては出ていない。結局ここにある選択肢の中ではアを妥当とすることになるであろう。

さて、そこで、こうした段落切りを選択肢で問うのではなく、この文章をなまでぶつけて、そこに子ど

もたちが、どのような段落意識をもつか、自由に段落を切らせて見たのが次の分析問題である。

[1] 次の文章の全体を意味の上から考えて、いくつかに分けるとすれば、あなたはどこで分けますか。分けると思うところに、それぞれ「」をつけなさい。

本文 (省略)

応答の結果を、調査問題の段落記号に合わせて整理すると、次のごとくである。(分析的問題の本文には段落は調査問題どおり分けてあるが、①から⑦までの記号は付してない。)これに同被験者の6月調査実施の際の選択を対比させて付記し一覧表にした。

表

21

分けた段数 (人数)	実際の分け方 (「」の記号は該当する調査問題選択肢)	人数	左の分け方をしたものの調査問題における選択。()内数値は人数
2 段 (2)	「12」と「34567」	2	イ(1), エ(1)
3 段 (18)	「12」と「3456」と「7」	10	ア(4), イ(2), ウ(4)
	「123」と「456」と「7」	2	ア(1), オ(1)
	「12」と「345」と「67」	2	ウ(2)
	「123」と「45」と「67」	1	イ(1)
	「1」と「23」と「4567」	1	オ(1)
	「1」と「2」と「34567」	1	ア(1)
	「1」と「2345」と「67」	1	イ(1)
4 段 (34)	「1」と「2」と「3456」と「7」 [ア]	23	ア(13), イ(1), ウ(9)
	「12」と「3」と「456」と「7」	3	ウ(3)
	「12」と「345」と「6」と「7」	3	イ(1), ウ(1), オ(1)
	「1」と「23」と「456」と「7」 [ウ]	2	ウ(1), エ(1)
	「12」と「34」と「56」と「7」 [エ]	1	オ(1)
	「123」と「4」と「5」と「67」 [オ]	1	イ(1)
	「1」と「2」と「34」と「567」	1	ア(1)
5 段 (17)	「1」と「2」と「3」と「456」と「7」	6	ア(1), イ(1), ウ(2), エ(2)
	「12」と「34」と「5」と「6」と「7」	4	ア(3), オ(1)
	「123」と「4」と「5」と「6」と「7」	4	ア(2), ウ(1), オ(1)
	「1」と「23」と「4」と「5」と「67」	3	ア(2), エ(1)
6 段 (10)	「1」と「2」と「34」と「5」と「6」と「7」	5	ア(1), イ(1), ウ(2), エ(1)
	「12」と「3」と「4」と「5」と「6」と「7」	4	エ(2), オ(2)
	「1」と「2」と「3」と「45」と「6」と「7」	1	ウ(1)

7 段 (16)	①と②と③と④と⑤と⑥と⑦	16	ア(5), ウ(7), オ(4)
	無答または無意味	3	エ(2), 無答(1)
計		100	ア(34) イ(10) ウ(33) エ(10) オ(12) 無答(1)

自由に段落を切らせた結果は、全体を4段に分けたものが最も多く、かつ、調査問題の選択肢アにあたる分け方をしたものがいちばん多かった。(23名)次に多いのが①②と③④⑤⑥と⑦の3段に分けたもの(10名)で、この二つはほぼ同類の段落意識と見なしてよいであろう。この他に、かなりはっきりした段落意識をもって分けたと考えられるのは、①②③と④⑤⑥と⑦の3段切(2名)と、①②と③と④⑤⑥と⑦の4段切(3名)である。あるいはさらに、①と②③と④⑤⑥と⑦(2名)と、①と②と③と④⑤⑥と⑦(6名)を加えてよいかも知れない。以上の46名のものが、一応それぞれ段落意識をもって応答していると考えられる。

調査問題のアの選択肢は、前述したように、このたびも最も多数のものが行なったわけ方であるが、6月調査でアを選択した34名についてみると、そのうち、13名が今回もこの分け方をしている。調査問題でアに匹敵する選択率をもってウの選択肢に該当する分け方はこのたびは2名あったのみである。イの選択肢は消え、エオに該当する分け方が1名ずつあった。これで見ると調査問題でアの選択肢はきわめて有力な選択肢であったと思われるのであるが、案外に応答率が低かったのは、選択肢法のもたらした惑わしによるものではないかと思う。しかしながらそこにはやはり③(寝巻の扱い)についての疑問からアをしりぞけてウを選んだであろうと推測されるもの、つまり、はっきりした段落意識をもってウを選択したであろうと思われるものも確かにいるのである。それは、この分析問題で、①②と③と④⑤⑥と⑦という分け方をした3名は、いずれも調査問題ではウを選択したものであることから、想像される。

この③段の扱いについて、この分析問題の調査の結果では、この部分だけ取り出してみると次のようになっている。

段落切	人数	左のものの調査問題における選択				
		ア	イ	ウ	エ	オ 無答
② J ③ ④	51	23	6	18	2	2
② ③ J ④	15	5	2	2	2	4
② J ③ J ④	14	1	1	6	4	2
その他(②③④, 7段切, 無答等)	20	5	1	7	2	4 1
	(100)	(34)	(10)	(33)	(10)	(12) (1)

これで見ると、③の段落を、④段の方へ続けてゆくものが半数をこしており、前に続け、もしくは独立させているもの29名である。そして調査問題における応答状況を調べてみると、その③段の扱いは、6月調査の場合とは必ずしも一致しない。ア(②)③④)とオ(②③)④)の選択者は、今回もそのように分けているものが多いが、他はむしろ逆になっている。(たとえばウは②③)④)であるが、今回はそうした分け方をしたもののよりも、②)③④)と分けているものの方がはるかに多い。

また前にあげた一応の段落意識をもって分けたと見られる6つの分け方にはいる46名のものについてその調査問題における選択を調べて見ると、次のような人数になっている。

ア……19 イ……4 ウ……19 エ……3 オ……1

以上のようなことから考えると、全国学力調査と今回の調査には3カ月が経過しているので、その間の子どもの文章読解力の相違ということも一応考慮する必要があるし、あるいは、小学校の部でも触れたように、子どもの読みの不安定性ということも、大きく作用していると思われるが、もっと本質的に、こうした問題における選択技法と自由記述法は、相当異なった結果が出るということが、ほぼ確実に言えるのではないと思われるのである。調査問題は「文の構成を読み取る力」をねらいとしているのであるが、この選択技法からは、文の構成を知的に考える力を見ることはできても、自ら文章を読んで、その文章の構成を読み取ってゆく力を見ることはできないのである。その点、自由記述による場合、選択技法よりもいくらかでもそれに近いものが出てきていると思うのである。この場合、調査問題におけるような選択技法と分析問題における自由記述による結果の違いは、むしろそこに見られる「文の構成を読み取る力」の側面の違いであるといっていいかも知れないのである。

さらに言うならば、文の構成というものを、単に段落を切りさせることによって読み取り得たことは問題であって、もちろん、段落を切ることによって、その重要な契機を把握し得るものではあるが、文章の展開はむしろ力動的に進むものであって、その力動的な構想の展開を読み取ることがたいせつな問題である。単に文章を平板的に切断して文の構成を理解しようとするのは、文章というものの本質的な理解には達し得ないと思われる。さきに③段の扱いについて種々述べたのは、そこに文章読解指導上のきわめて大きな問題があることを指摘したかったからである。

(2) 調査問題 [4] II 1, 2

II 1 次の④、⑤、⑥、⑦、⑧を、どんな順に続けたら、全体として意味のまとまった一つづきの文章になるでしょうか。答えは、アからオまでの中から、最も適当なものを一つ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

- ④ 意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。⁽¹⁾もと、瀬戸^{せと}という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。⁽²⁾
- ⑤ たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって「やぶく」となったりする。
- ⑥ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。⁽³⁾
- ⑦ 意味が狭くなることもある。⁽⁴⁾衣服一般の意味であった「ころもが、僧衣のことになったのが、こ

れである。(5)

㊦ 意味も、時とともに変化するものがある。

ア ㊸, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼の順 (5.3)

イ ㊸, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼の順 (9.1)

ウ ㊼, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼の順 (5.2.4) [4.2.7] [4.6.6]

エ ㊼, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼の順 (19.9)

オ ㊼, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼の順 (11.8)

(無答 1.5)

2 次の文を、I からVの(1)から(5)までの中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。答えは、

アからオまでの中から、最も適当なものを一つ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられたりするのも、この例である。

ア (1) イ (2) ウ (3) エ (4) オ (5)

[2.7.7] [3.0.1]

()内数値は、県抽出10校の応答分析結果による応答率。[]内数値は、全県平均正答率。同じく太字は全国平均正答率。(2については県抽出10校の応答分析が行われていない)

この調査問題IIから解説したい。この問題は、「文章を組み立てる力」が出題のねらいとされている。

いま実際にこの問題を解く手順を考えてみたい。まず、㊹がゴジックになっているので、これを中心に考えることになる。すなわち、この選択肢を見て、被験者はまず㊸㊹、㊼㊹、㊺㊹、この三つの接続を比較検討し、㊼㊹の接続が最も妥当なことを見出す。そこで選択肢ウとエが残ることになる。次にこのウとエを見ると、㊼㊹㊺まで同じなので、これに続く㊸㊹と㊼㊹との接続を考え、㊺㊸㊹の方がよいことを判断する。そこでウが正答として選ばれてくる。ところでこの前段では㊹の「たとえば」という例示の内容が、㊸、㊼、㊺のいずれの具体例になっているかを読み取ることによって選択され、後段では㊼の「意味が狭くなることもある。」の「も」の助詞のはたらきに注目することから、㊺㊸㊹という接続が正しいものと判断されることになる。したがって、この問題は「文章を組み立てる力」といっても、実は文章の接続における ①説明と事例の対応、②「も」という助詞の使用が、問題の中心になっているのである。このような、説明と事例の対応とか、助詞「も」の使い方というようなことが、文章を組み立てる上に、その要素的な学力の一部であることは認めるにしても、このような問題の出し方、いわば乱丁を直す操作のような問題場面で扱うことが、はたして「文章を組み立てる力」を見るにふさわしいであろうか。本来文章は横木細工を組み立てるようなものではなく、想の展開に従って順次発展的に組み立てられてゆくものである。こうした文章を組み立ててゆく力動的な作文力は、この問題では見ることができない。この問題は、文章読解における説明と事例の関係、助詞「も」の使用についての単なる知的理解の出題に終わっている。

そこで、分析的問題では、各選択肢の記号で表わされているものを一続きの文章に書き下し、これを読むことによって想の展開の最も自然なものを発見することができるかどうかを問題とした。文章の組み立てには、想の自然の展開が必要であり、想の展開に違和感を覚えるような場合には、文章としてそこに問題があることを発見できなければならない。このような読解力が実は文章を組み立ててゆく作文力と表裏一体のものと考えられるからである。こうした出題の結果と、調査問題の結果を比べてみたいと考えた。そこでまず第一に、調査問題をそっくりそのまま今回も行なってみた(分析的問題Ⅱ一)その結果は、応答部分だけ記すと次のごとくである。

ア	①・②・③・④の順	2	(9)
イ	①・②・③・④の順	2	(5)
ウ	③・②・①・④の順	67	(37)
エ	③・②・①・④の順	13	(28)
オ	③・②・④・①の順	16	(18)

()内数値は、同一被験者の6月実施の調査問題における応答である。

同一被験者の6月実施の際のと比較してみると、表23のごとくである。

今回の調査では正答率がたいへん高く、6月の調査でかなりの分散度をもっていたのが、この度はウに集中している。これはおそらく調査問題では、この問題が全問題の終りに出てくるため、心身の疲労も加わって、こうしたややこしい問題を考えることがじゅうぶんできなかったのではないかとと思われる。このたびは同じ問題内容でありながら、時間的にゆっくり考えることができたので、正答率がかくも上昇したのではないと思われる。こうした錯雑した、思考の緊張の持続を要する問題は心身の疲労度と密接な関係のあることを考慮に入れる必要があると思われる。

表	調	Ⅱ					計
		ア	イ	ウ	エ	オ	
23	ア			6	2	1	9
	イ			1	1	3	5
	ウ	1	1	26	4	5	37
	エ	1	1	22	3	1	28
	オ			11	2	5	18
	無答			1	1	1	3
	計	2	2	67	13	16	100

次に前述した分析的問題を記す。この書き下しの問題は、**アイウエオ**全部について行なっては量が多まりに多く読み疲れのため正当な反応の出ないおそれがあるので、県抽出10か校の応答分析で応答の多く見られた**ウエオ**について行なった。

Ⅱ一 左の**ア**、**イ**、**ウ**は、ある文章を五つの小段階にくぎって、それぞれその順序を入れかえて綴ったものです。いまこの三つを読みくらべたとき、全体として意味のまとまった一つづきの文章として、どれが最も適当と思うか。一つを選んでその記号を○で囲みなさい。

ア 意味も、時とともに変化するものがある。

たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く」からの影響によって「やぶく」となったりする。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が、僧衣のことになったのがこれ

である。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸^{せと}という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

イ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり「破る」が「裂く^さ」からの影響によって「やぶく」となったりする。

意味も、時とともに変化するものがある。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになったのが、これである。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸^{せと}という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

ウ 単語の形は、時の移るにつれて変化することがある。この中には、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

たとえば、「ながく」が「しばらく」からの影響によって「ながらく」となり、「破る」が「裂く^さ」からの影響によって「やぶく」となったりする。

意味も、時とともに変化するものがある。

意味が変化した場合、前の意味よりいっそう広い意味になることがある。もと、瀬戸^{せと}という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が、やがて、陶器一般の名称となったのは、この例である。

意味が狭くなることもある。衣服一般の意味であった「ころも」が、僧衣のことになったのが、これである。

ア	5	(〔Ⅱ〕一でこれに該当する選択肢	オ	16)
イ	16	("	エ	13)
ウ	71	("	ウ	67)
無答	8			

〔Ⅱ〕一(調査問題をそのまま行なったもの)の応答とこの書き下し文で出した〔Ⅱ〕一の応答との関連を見ると表24のごとくである。〔Ⅱ〕一でオを選択したもの(〔Ⅱ〕一では選択肢アに当たる)の大部分がイとウ(〔Ⅱ〕一のエ、ウに当たる)に移動したのが目立っている。このイ、ウの違いは、前にも述べたように、「意味が狭くなることもある。」の「も」の動詞を注意深く読んだかどうかによるものである。〔Ⅱ〕一

表
24

Ⅱ	Ⅱ一	ア	イ	ウ	無答	計
ア				1	1	2
イ			1	1		2
ウ	2	4	56		5	67
エ	2	6	4		1	13
オ	1	5	9		1	16
計	5	16	71		8	100

において正答肢ウを選択していたもの67名のうち、この〔Ⅱ〕でも同じくウを選択したものは56名で、6名がア、イ(〔Ⅱ〕でいえば、オ、エに当たる)に移り、5名が無答であった。結局正答は67から71に4名の増加にとどまった。

実はこの分析的問題を設計した時の予想では、県抽出10校の応答分析結果から見て、〔Ⅱ〕(調査問題をそのまま行なうもの)の正答率は50%程度であろうと予想し、これがこの〔Ⅱ〕の問題でどれだけ伸びるかを一つの目安としていたが、〔Ⅱ〕の正答者が意外に多かったため、ここに意図した伸びを見ることはできなかった。〔Ⅱ〕と〔Ⅱ〕は同一内容であるので等質群による比較法を用いたならば、多少この違いは数値の上にも出てきたかも知れない。

以上のごとく〔Ⅱ〕では期待した結果を直接数値の上に見ることはできなかったが、同一問題紙で問うたその選択の理由の自由記述にはかなり興味深い応答が見られた。

〔Ⅱ〕 右のア、イ、ウのうち、適当でないと思った二つのものについて、それぞれ()の中にその記号を書き入れて、どういう点がよくないか、そのわけを説明しなさい。

()

()

いま〔Ⅱ〕において正答ウを選択したものについて、この〔Ⅱ〕での答を見ると、そのおもなものは次のようなものであった。

- (ア) ○ 全体の順序がバラバラで意味をなさない。
○ 「意味も、時とともに変化するものがある。」この書き出しが唐突である。
○ 「意味も、時とともに変化するものがある。」この一行と次の「たとえば……」の続きがおかしい。
- (イ) ○ 「意味が狭くなることもある。」この「も」が前にくるのはおかしい。
○ 「意味も、時とともに変化するものがある。」とあれば、次にその説明がくるはずなのにそれがない。

〔Ⅱ〕でウを選んだものでも、以上のようなことをはっきり書いているものもあれば、はっきり書いていないものもあり、無答のものもかなり多いのである。

ところで次に、〔Ⅱ〕でイを選択しウを否定したもの(16名)の中に次のような答えをしたものが数名あった。

- (ウ) ○ 文章の終りが終りらしく終わっていないので、まだ文章が続くような文である。

これはたいへん興味深い答で、こういうことが読み取れるのは、それだけについていえば、なかなかすばらしい読解力だと思う。これは実際に、この文章はこのあとに、問題2にある「「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられたりするもの、この例である。」という文が続くわけで、これが本文に省かれているのである。このようなことから考えると、調査問題でエを選択したものの中には、

こうした見解のものも含まれていたかも知れない。

次に調査問題Ⅱ 2は、「文章を組み立てる力、ことばのきまりの理解(単語の形や意味の変化)」ということが、その出題のねらいとされている。具体的には、「『花見』の『花』のように、『花』が桜に限って用いられたりするのも、この例である。」という文を、Ⅱ 1の本文の中のどこへ挿入するかという形で出されている。おそらく被験者は、この文をⅡ 1本文の(1)から(5)までの記号の場所にそれぞれ当てはめてみて前後の続きの最も妥当と思われるものを選ぶという手順をとったであろう。そしてその場合この具体的事例とその説明に当たることばとの理論的一致を見出すことが判断の基準となったであろう。分析的問題はこの点から検討を進めたいと考え設計された。

まずⅡ 2で、調査問題をそのままの形で実施した結果から記す。

ア	イ	ウ	エ	オ	無答
6	7	21	17	48	1
(10)	(23)	(17)	(16)	(29)	(5)

()内数値は、同一被験者の6月実施の調査問題における応答である。

この6月の調査の応答と今回のⅡ 2の応答の関係は表25に見るごとくで、6月の調査でア、イに反応したものが、ウ、エ、オに変わったものが多く、ウに反応したものは、かなりの数が他へ分散し、エに反応したものはその大多数オへ移動した。オに反応したものは、いくらかアとエに移動した。結局正答肢オが29から48へ高まった。これはおそらくⅡ 1の場合と同じく被験者が落ち看いてこの問題に解答したためであろうと思う。それにしてもこの正答率はやはり低いと言わねばならない。

表 25

Ⅱ 2 調	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
ア	1	1	2	2	4		10
イ		4	5	5	9		23
ウ	2	1	7	3	3	1	17
エ	1		2	1	12		16
オ	2	1	1	5	20		29
無答			4	1			5
計	6	7	21	17	48	1	100

Ⅱ 2の問題で選択肢エを選んだものは、この事例が「意味が狭くなることもある。」の具体例であることは理解しているが、「『花見』の『花』のように、『花』が桜に限って用いられたりするのも、この例である。」の「も」に注意を払わなかったものであろう。選択肢ウを選んだものが案外に多いのであるが、これはおそらく、㊸㊹㊺のいずれもが具体事例めいた文句が書いてあるのに㊸にはこれがないので、内容も吟味せずに㊸の場所へ入れたのであろう。実は㊸㊹と続く文であることを理解すればこうした誤りはしなかったはずである。ところが、Ⅱ 1で㊸㊹と続けて理解してウもしくはエを選択しておきながら、このⅡ 2でウを選択しているものが、13名もあるのである。(ウの選択者21名のうち)少なくともこの者はⅡ 2の問題の時にはすでにⅡ 1の問題を忘れ、その上㊸の内容もじゅうぶんに吟味せず、ただ一見した形の上からウを選択したものである。

さて、分析的問題では、Ⅱ 2の問題の後に次の問題を行なった。

Ⅳ 次のA群に書いてあることがらの説明として、それぞれ該当するものを、B群の中から選んで、その記号を()の中に書き入れなさい。

A () 1 「ながく」が「ながらく」になり、「破る」が「やぶく」になる。

- () 2 「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられる。
 - () 3 瀬戸という土地から産する陶器をさした「瀬戸物」が陶器一般の名称になる。
 - () 4 衣服一般の意味であった「ころも」が僧衣のことになる。
- B ア 単語の意味が変化した場合、前の意味より広い意味になることがある。
- イ 単語の意味が変化した場合、前の意味より狭い意味になることがある。
- ウ 単語の形が、形や意味の似かよった他の単語からの影響によって、変化するものがある。

その応答は表 26 のごとくである。ゴジックで表わしたのが 1 ~ 4 のそれぞれの正答である。いま問題にしている 2 の問題では 80 名が正答している。正答率はたいへん高い。

なお、この 4 問題の完全正答について調べると表 27 のごとくである。

表 26

A \ B	1	2	3	4
ア	18	7	69	10
イ	7	80	10	77
ウ	78	9	20	12
無答	2	4	1	1
計	100	100	100	100

各問題別の正答率は相当高いにかかわらず、完全正答は 57 である。

さて、この [I] と [IV] の問題を行

なった後、分析的問題は、もう一度 [II] (調査問題 II 2 と同じもの) と同じ問題を行なってみた。[I]、[IV] の問題を行なうことによって、それが作用してそこにどのような変化が見られるか、そこに指導上の問題も考えられはしないかと考えたからである。

表 27

1	○	○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	75
2	○	○	×	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	80
3	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	69
4	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×	77
人数	57	4	3	5	3	1	5	3	1	8	1	6	3	100

V これは前に解答した問題ですが、もう一度よく考えて答えてください。答えは、前のときのと変わってもかまいません。

- ㉑ 本文省略
- ㉒
- ㉓
- ㉔
- ㉕

次の文を、右の V の 1 から 5 までの中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。最も適当なものを一つ選んで、その番号を○で囲みなさい。

「花見」の「花」のように、「花」が桜に限って用いられたりするのも、この例である。

答 え

1	2	3	4	5
2	4	14	15	62

この結果を、同一被験者の6月調査問題実施の際の応答、ならびに〔Ⅱ〕の応答と並記すると表28のごとくである。正答は29→48→62と上昇した。その移動の内容を見るべく〔Ⅱ〕とVの関係を見たのが、表29である。(調査問題と〔Ⅱ〕の関係は既に記した。46頁参照)

表 28

	原	Ⅱ	V
ア(1)	10	6	2
イ(2)	23	7	4
ウ(3)	17	21	14
エ(4)	16	17	15
オ(5)	24	48	62
無答	5	1	3

a. 正答肢から正答肢へ (オ→5) 45

b. 誤答肢から正答肢へ

(ア→5)	4
(イ→5)	4
(ウ→5)	6
(エ→5)	3
(オ→2)	1
(オ→4)	2

表 29

〔Ⅱ〕	〔V〕						計
	1	2	3	4	5	無答	
ア	1	1			4		6
イ		1		1	4	1	7
ウ	1	1	11	2	6		21
エ			2	10	3	2	17
オ		1		2	45		48
無答			1				1
計	2	4	14	15	62	3	100

以上65名のものについて、その各問題に対する応答を見てみたい。下に掲げるのはその応答一覧表である。

調Ⅱ1	調Ⅱ2	Ⅱ一	Ⅱ二	Ⅲ一	Ⅳ2	V	人数	調Ⅱ1	調Ⅱ2	Ⅱ一	Ⅱ二	Ⅲ一	Ⅳ2	V	人数
ウ	オ	ウ	オ	ウ	イ	5	12	ウ	オ	ウ	オ	ウ	イ	5	1
ウ	エ	ウ	オ	ウ	イ	5	4	エ	エ	ウ	オ	イ	イ	5	1
ウ	イ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	エ	イ	ウ	オ	ウ	イ	5	1
エ	オ	ウ	オ	ウ	イ	5	3	イ	ア	ウ	オ	ウ	ム	5	1
エ	エ	ウ	オ	ウ	イ	5	2	イ	オ	エ	オ	イ	イ	5	1
エ	ウ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	エ	オ	エ	オ	イ	イ	5	1
オ	オ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	ウ	ア	エ	オ	イ	イ	5	1
オ	イ	ウ	オ	ウ	イ	5	3	ウ	イ	エ	オ	イ	イ	5	1
オ	エ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	エ	ア	イ	オ	ウ	イ	5	1
オ	ウ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	イ	エ	オ	オ	イ	ウ	5	1
オ	ウ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	オ	イ	オ	オ	イ	ウ	5	1
ア	ア	ウ	オ	ウ	イ	5	1	ウ	エ	オ	オ	ム	ム	5	1
ア	イ	ウ	オ	ウ	イ	5	1								(12)
ム	イ	ウ	オ	ウ	イ	5	1	エ	オ	ウ	ア	ウ	イ	5	1
							(33)	ア	オ	エ	ア	ウ	イ	5	1

11 調II2	II- II二 III- IV2 V	人数	調III1 調II2	II- II二 III- IV2 V	人数
ウ	オ ア イ イ 5	1	オ エ	ウ エ ウ イ 5	1
ア	ア ア ウ ア 5	1	ウ イ	ウ エ ウ イ 5	1
		(4)	エ オ	ウ エ ウ イ 5	1
ア	ウ イ ウ イ 5	1			(3)
イ	ウ イ イ イ 5	1	ウ オ	ウ オ ウ イ 2	1
オ	イ イ イ ム 5	1			(1)
ウ	エ イ ム イ 5	1	ウ エ	オ オ ウ イ 4	1
		(4)	ウ エ	ウ オ ウ イ 4	1
ア	ウ ウ ウ イ 5	1			(2)
エ	ウ ウ ウ イ 5	1			
ウ	ウ ウ イ イ 5	1			
オ	ウ ウ イ ア 5	1			
ア	ウ ウ ウ ア 5	1			
イ	ウ ウ ウ ウ 5	1			
		(6)			

注 イ・……問題IVの不完全正答

ム………無 答

調II一, 原II二は被験者の6月調査問題実施の際の応答である。

II二からVへともに正答肢を選んだaの45名についてみると、そのうち33名はII一からVまで全部正答している。ただし、うち3名はIVの問題が不完全正答である。他の12名について見ると、その8名までがIV2でイ(正答肢)を選んでいる。(うち1名はIVの問題不完全正答)。あとの4名はIV2のところ2名がウを選び、2名が無答である。IV2でウを選択するならVでは当然3に回答しなければならないわけであって、自家撞着した選択である。ただしこの2名はII二でオを選択しており、Vの応答と一致しており、むしろIV2のウという選択が気紛れの誤答であったかも知れない。また、この12名のII一の選択を見ると、イを選択しているものが7名ある。ほかにウが2名、無答が3名。特にII一でエを選択したものの4名がそろってII一でイを選択しているのが注目される。(II一のイは、II一のエの書下し文である。)この4名はII一の分析問題では特別考えが変わらなかったことを示している。

なお、6月実施の調査問題のIII1 II2の応答を含めて、今回の分析的問題を、全部一貫して正答しているものは12名あった。

次に、誤答から正答へ変わったbの17名について見ると、IV2でイ(正答肢)を選んだものの12名はアが3名、ウが1名、無答1名である。ウについては前に触れたが、アの場合も、このIV2でアを選択するならVは当然1もしくは2を選択すべきことになる。5を選択したのはIVとVを関連させて考えると自家撞着になる。また、II一について見ると、ウを選んだものは11名、イが5名、無答1名である。この17名のうち、II一ウ、IV2イとともに正答したものの8名、II一を正答しIV2を誤答したものの3名、II一を誤答し、IV2を正答したものの4名、II一IV2ともに誤答したものの2名である。この応答の結果から直接、分析的問題のII一、IV2をしたために誤答が正答に変わったと言うことはできかねる。それは実はVで正答できなかったもので、II一、IV2を正答しているものが後に述べるように相当にい

るからである。ただ、誤答から正答に変わった17名のものには、この分析的問題をすることがVの問題解決により意味での影響を与えたとは言えるであろう。

次に、正答から誤答に変わったcの3名について見ると、いずれもII-U、IV2-Iを選択し正解している。この中[V]で4を選んだ2名は、「「花」が校に限って用いられたりするもの」の「も」への注目が足らなかったため、5を選ばずに4を選んだものと思われる。この2名は調II2でエを選択しており、今回の調査では[V]の段階で再び元へもどったかたちである。Vで2を選択したものは、調査問題も今回の分析調査もすべて正答してきており、この最後の[V]の問題でなぜ2を選択したのか、この調査の上では推測することができない。

次に、以上65名以外の、[II]二と[V]もともに誤答になっている35名について、その各問題の応答を見ると次の如くである。

調II 1	調II 2	[II]-[II]二	[III]-[IV]2	[V]	人数	調II 1	調II 2	[II]-[II]二	[III]-[IV]2	[V]	人数			
エ	ウ	ウ	ア	ウ	イ	1	ウ	イ	エ	イ	イ	ア	4	1
イ	ウ	オ	ウ	イ	ウ	1	ム	ム	オ	ウ	ウ	イ	4	1
					(2)	オ	イ	オ	ウ	イ	ム	4	1	
イ	エ	オ	ア	ウ	イ	2	エ	オ	ウ	エ	ウ	イ	4	2
ウ	イ	ウ	イ	ア	ア	2	ウ	ウ	ウ	エ	ウ	イ	4	1
ウ	エ	ウ	ウ	ウ	イ	2	エ	ウ	ウ	エ	ウ	イ	4	1
					(3)	エ	イ	ウ	エ	ム	イ	4	1	
ム	ム	エ	ウ	ウ	イ	3	オ	イ	エ	エ	イ	イ	4	1
オ	イ	エ	ウ	ウ	イ	3	エ	ウ	エ	エ	ア	イ	4	1
エ	イ	エ	ウ	ウ	ア	3	エ	ア	オ	エ	ウ	イ	4	1
ア	ウ	オ	ウ	ウ	イ	3	オ	イ	オ	エ	ウ	イ	4	1
ウ	イ	オ	ウ	ウ	イ	3	オ	イ	オ	エ	ア	イ	4	1
ウ	ウ	オ	ウ	ウ	イ	3							(13)	
ウ	ム	ウ	ウ	ウ	ウ	3	ア	イ	エ	イ	ア	ウ	ム	1
エ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	3	オ	オ	ウ	エ	ウ	イ	ム	1
エ	ム	ウ	ウ	ウ	ウ	3	ウ	オ	ウ	エ	ア	イ	ム	1
エ	ウ	ウ	ウ	ム	ア	3							(3)	
エ	ウ	ア	ウ	ム	イ	3								
エ	ア	ウ	エ	ム	イ	3								
オ	ム	オ	エ	ウ	ウ	3								
ア	ウ	ウ	ム	ウ	イ	3								
					(14)									

いまこの35名の応答について見ると、III-U、IV2-Iと、ともに正答したものが17名、III-Iを正答してIV2を誤答しているもの5名、III-Iを誤答しIV2を正答しているもの7名、III-IとIV2ともに誤答

しているもの6名である。この〔Ⅱ〕-〔Ⅳ〕2両者をともに正答した17名のものは、〔Ⅱ〕-〔Ⅳ〕2の問題で正答しながらVの問題で再び誤答にもどったわけ。そのうち特に〔Ⅱ〕二と全く同じ選択に戻ったものが12名ある。(〔Ⅱ〕二-〔Ⅳ〕2の選択 アー1(1名), ウー3(5名), エー4(6名))結局、この人たちには、ⅡやⅣの分析的問題がVの問題解決に何ら影響を及ぼさなかったと言えるであろう。

また、こうしたことは、次のような点からも言えるようである。いまⅣ2とVの応答について見ると、そこに論理的筋の通った応答を求めるならば、前にも述べたことであるが、Ⅳ2でアを選んだものはVでは1もしくは2、〔Ⅳ〕2でイを選んだものはVでは4もしくは5、〔Ⅳ〕2でウを選んだものはVでは3を選ばなければならないことになる。いまこれをこの35名について見ると、表30に見るごとく、筋の通らない答えをしているものがずいぶん多いのである。これは問題ごとにそれに反応するだけで、思考が順を追って持続的に進展するということがないためではなからうか。そこに前後一貫性のない応答があらわれる結果になるのだと思う。

次に、〔Ⅱ〕二、〔Ⅳ〕2の応答が変化しなかったウー3の11名と、エー4の10名について少しく見てみたい。

表	V		計	
	筋の通った答	筋の通らない答		
30	ア	1	3	4
	イ	11	13	24
	ウ	4	2	6
	無答		1	1
	計	16	19	35

まず、〔Ⅱ〕二ウ、〔Ⅳ〕2をウ、イと正答しているもの5名であるが、結局〔Ⅳ〕2において〔Ⅱ〕二と同じ選択肢3にもどってしまい、〔Ⅳ〕2と〔Ⅳ〕2の選択が筋の通らぬものになってしまっている。また、〔Ⅳ〕2でウを選んだ3名は、〔Ⅳ〕2の選択との間に筋は通っているが〔Ⅱ〕二での誤答を最後まで押し通しており、このものは、その誤答の原因が、「「花見」の「花」云々」の事例とその説明の関係が正しくつかめなかったことにあったことが推測されるのである。

次に、〔Ⅱ〕二エ、〔Ⅳ〕2をエ、イと正答している10名について見ると、この10名は、〔Ⅳ〕2でことごとくイを選んでいる。かつまた、そのうち6名は、〔Ⅱ〕二もウと正答している。このものは、〔Ⅳ〕2と〔Ⅳ〕2の選択に筋が通っており、結局、「「花」が桜に限って用いられたりするもの」の「も」に注目が足りなかったため、5を選ばず4を選んだものと推測されるのである。

以上、個々の応答についてやや細かに見てきたが、前にも記したように、この問題の正答は、分析的問題〔Ⅱ〕と〔Ⅳ〕2中にはさんで、48名から62名へと上昇しているものであって、具体的に文章として読むことや、説明と事例の関係を落ち着いて考えることによって、文章の理解が格段と進んだことを示している。しかもそれは、分析的問題として行なっただけで、特別その内容の具体的指導を行なったわけではない。もしこの分析的問題に、助詞「も」の使用に注目させる設問を更に加えていたならば、その正答は62名より更に上回る結果になったであろうと思われる。学習指導の問題として、文章の読みを基本としながら、その文章理解に必要な知識や文法を懇切丁寧に学習するということが、いかにたいせつであるか、それがどれほど文章の読みとその理解を深めるか、はかり知れないものがあると思うのである。

(執筆 大竹大三)